参考資料３

令和３年度「国語に関する世論調査」の結果の概要

調査目的・方法等

調査主体：文化庁国語課（業務委託先：一般社団法人中央調査社）

調査目的：現在の社会状況の変化に伴う日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起する。

調査時期：令和４年　１月21日～２月21日

調査対象：全国16歳以上の個人

調査対象総数	6,000	人	
有効回答数（率）	3,579	人	（　59.7%　）

調査方法：郵送法

※　新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、令和２年度調査以降、調査方法を令和元年度調査以前の面接聴取法から郵送法に変更した。

※　令和３年度調査は、令和元年度以前の調査（調査員による面接聴取法）とは調査方法が異なるため、令和元年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要である。

文化庁

備　考

・　百分比は、各問いの回答者数を 100％として算出し、小数第２位を四捨五入したため、百分比の合計が 100％にならない場合がある。内訳とその小計においても同様である。

・　百分比の差を示す「ポイント」については、小数第１位を四捨五入して示した。

・　１回答者が二つ以上の回答をすることができる質問（調査票で「○は幾つでも」、「○は三つまで」等と二つ以上の回答個数を指示したもの）では、回答率の合計が100％を超えることがある。

・　図表等に「－」と表示してあるのは、回答者がいなかった場合である。
「0.0」と表示してあるのは、回答者が１人以上いるが、百分比の小数第２位を四捨五入した結果、「0.0」となったものである。

・　図表等に「n=1,000」等と示されているのは、その問いの回答数の全数である。特に示されていない場合は今回調査全体の回答数（3,579）となる。

・ 各質問の冒頭で、（P.10）等と示されたページ数は、本調査の報告書において、該当する質問が記載されているページである。

目　　次

Ⅰ　国語に対する認識

＜問１＞　国語に関心があるか ･･･ 1
　＜問１付問＞　関心がある点 ･･･ 3
＜問２＞　言葉や言葉の使い方について社会全般で課題があると思うか ･････････････････ 6
　＜問２付問＞　社会全般の課題 ･･ 7
＜問３＞　言葉や言葉の使い方について自分自身に課題があると思うか ･････････････････ 9
　＜問３付問＞　自分自身の課題 ･･10

Ⅱ　生活の変化とコミュニケーションに関する意識

＜問４＞　情報機器の普及で言葉や言葉の使い方が影響を受けると思うか ･････････････12
　＜問４付問＞　情報機器の普及で受けると思う影響 ･･････････････････････････････13
＜問５＞　「人流」「ブレークスルー感染」等の言葉の使われ方の印象 ･････････････････15

Ⅲ　ローマ字表記に関する意識

＜問６＞　日本語がローマ字で書き表されているのを見ることがあるか ･････････････････17
　＜問６付問＞　日本語がローマ字で書き表されているのを見る場所 ･･････････････････18
＜問７＞　情報機器における日本語入力でのローマ字入力の使用 ･･････････････････････20
＜問８＞　日本語をローマ字で書き表すことがあるか ･･････････････････････････････21
　＜問８付問＞　日本語をローマ字で書き表す場面 ･･････････････････････････････････22
＜問９＞　どのローマ字表記を使うか（「明石（あかし）」、「厚木（あつぎ）」など） ･･･24

Ⅳ　言葉遣いに対する印象や、慣用句等の認識と使用

＜問 10＞　気になる言葉（「なにげに」「ぶっちゃけ」等を使うことがあるか） ･････････30
＜問 11＞　気になる言葉（「なにげに」「ぶっちゃけ」等が気になるか） ･･････････････34
＜問 12＞　「姑息」「割愛する」等の言葉は、どちらの意味だと思うか･･････････････････36
＜問 13＞　「声を荒（あ）らげる／声を荒（あら）らげる」等の言い方は、どちらを使うか･･･38

Ⅰ　国語に対する認識

＊ 報告書におけるページ数

＜問１＞ 国語に関心があるか　（＊ p.3）

― 「関心がある（計）」が８割を超えている ―

〔 問１：質問 〕

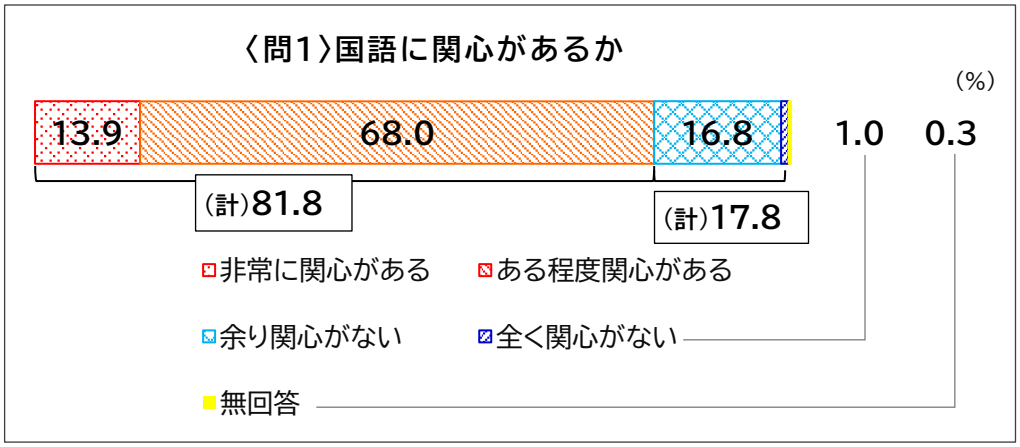
あなたは、日常の言葉遣いや話し方、あるいは文章の書き方など、国語について、どの程度関心がありますか。　（一つ回答）

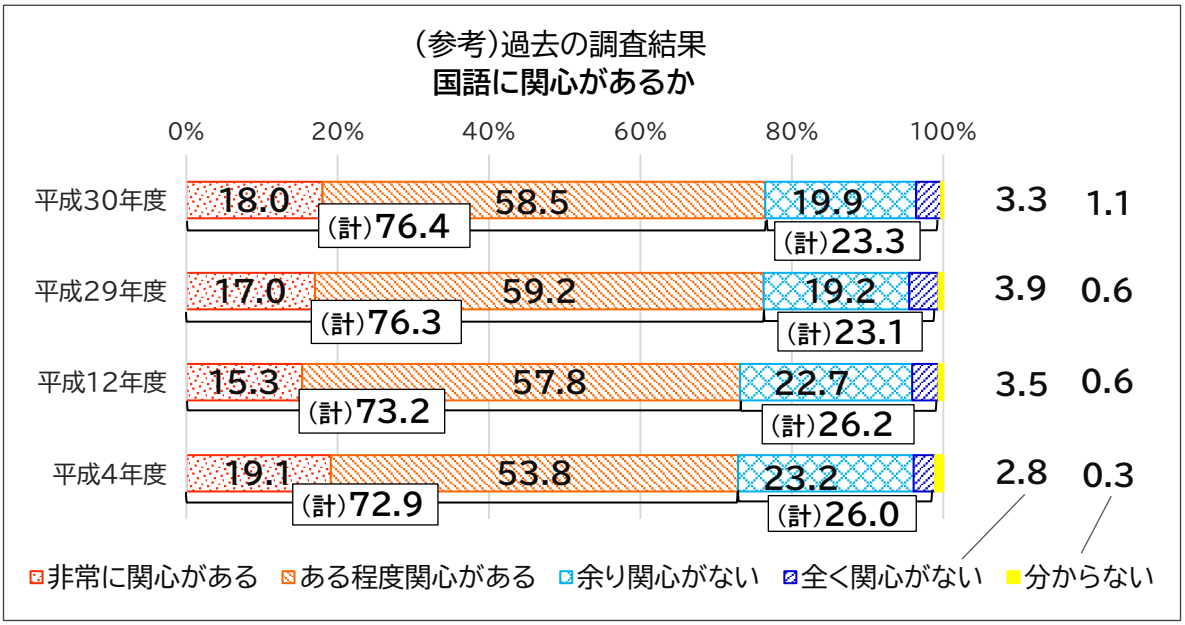
〔 問１：全体の結果、（参考）過去の調査結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

「非常に関心がある」を選択した人の割合が 13.9%、「ある程度関心がある」が 68.0%で、この二つを合わせた「関心がある（計）」は 81.8%となっている。一方、「全く関心がない」は 1.0%、「余り関心がない」は 16.8%で、この二つを合わせた「関心がない（計）」は 17.8%となっている。

また、令和２年度から調査方法が変わったため、今回の調査結果との比較には注意が必要だが、過去の調査結果（平成 4、12、29、30 年度）を参考値として下のグラフに示す。



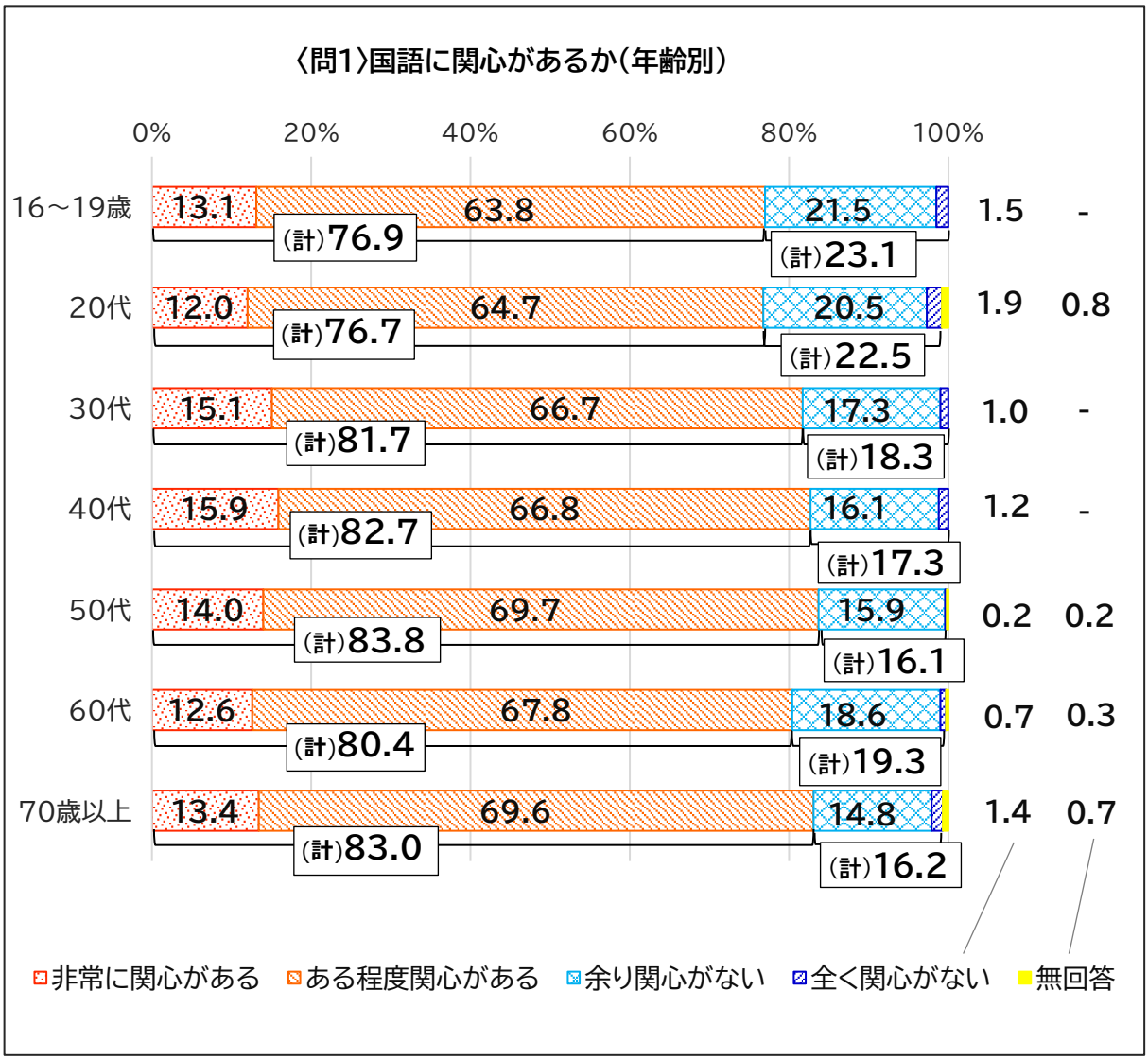


＊　調査方法の変更のため、令和元年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問１：年齢別の結果 〕

年齢別の結果は、次のグラフのとおり。

年代による差は大きくないが、「関心がある（計）」の割合は、20 代以下で７割台後半と、ほかの年代より、やや低くなっている。



＜問１付問＞ 関心がある点 （＊ p.5）

― 「日常の言葉遣いや話し方」が約８割と最も高い ―

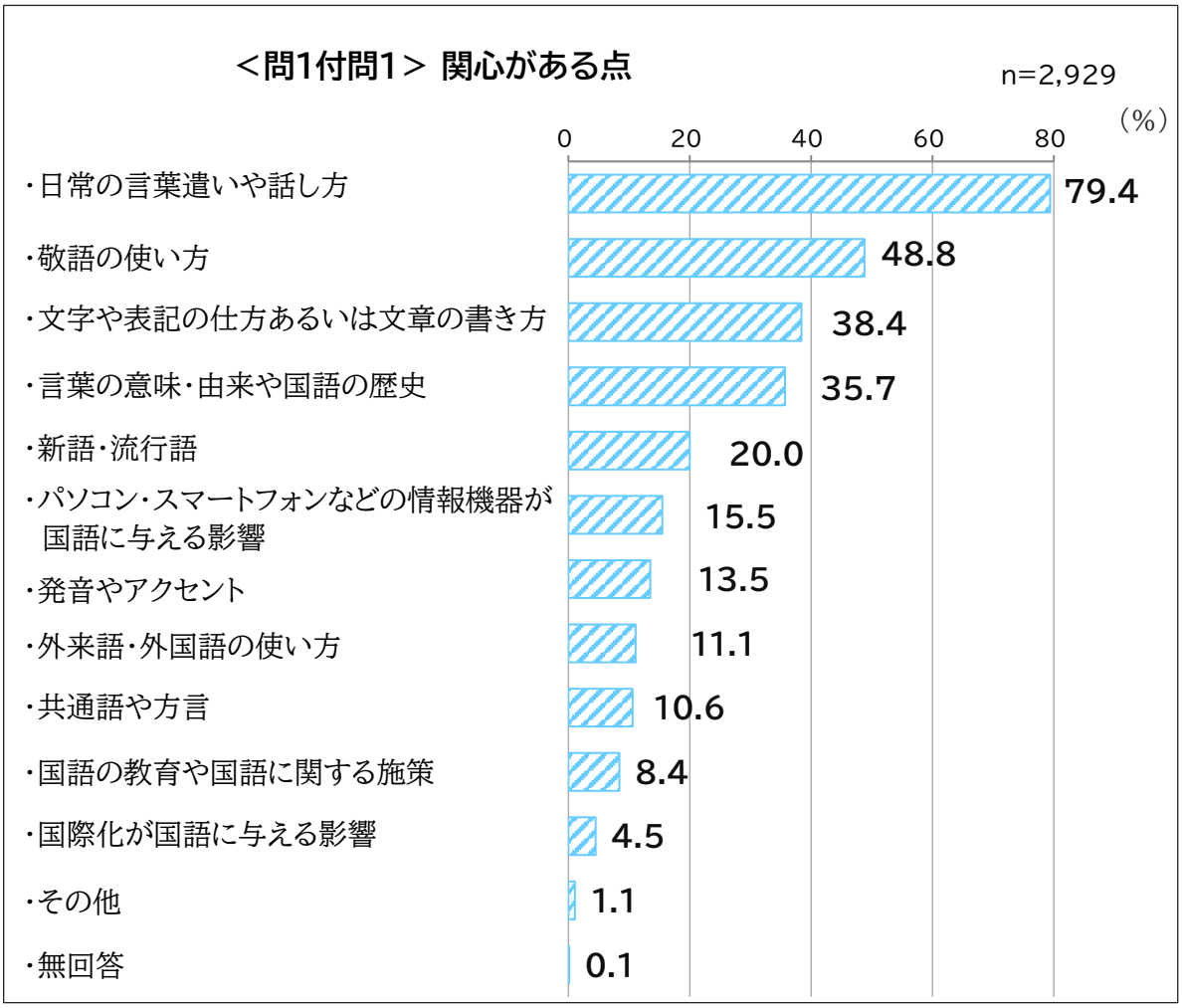
〔 問１付問 ：質問 〕

（問１で「非常に関心がある」、「ある程度関心がある」と答えた人（全体の 81.8%）に対して）
国語のどのような点に関心がありますか。 （三つまで回答）

〔 問１付問：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

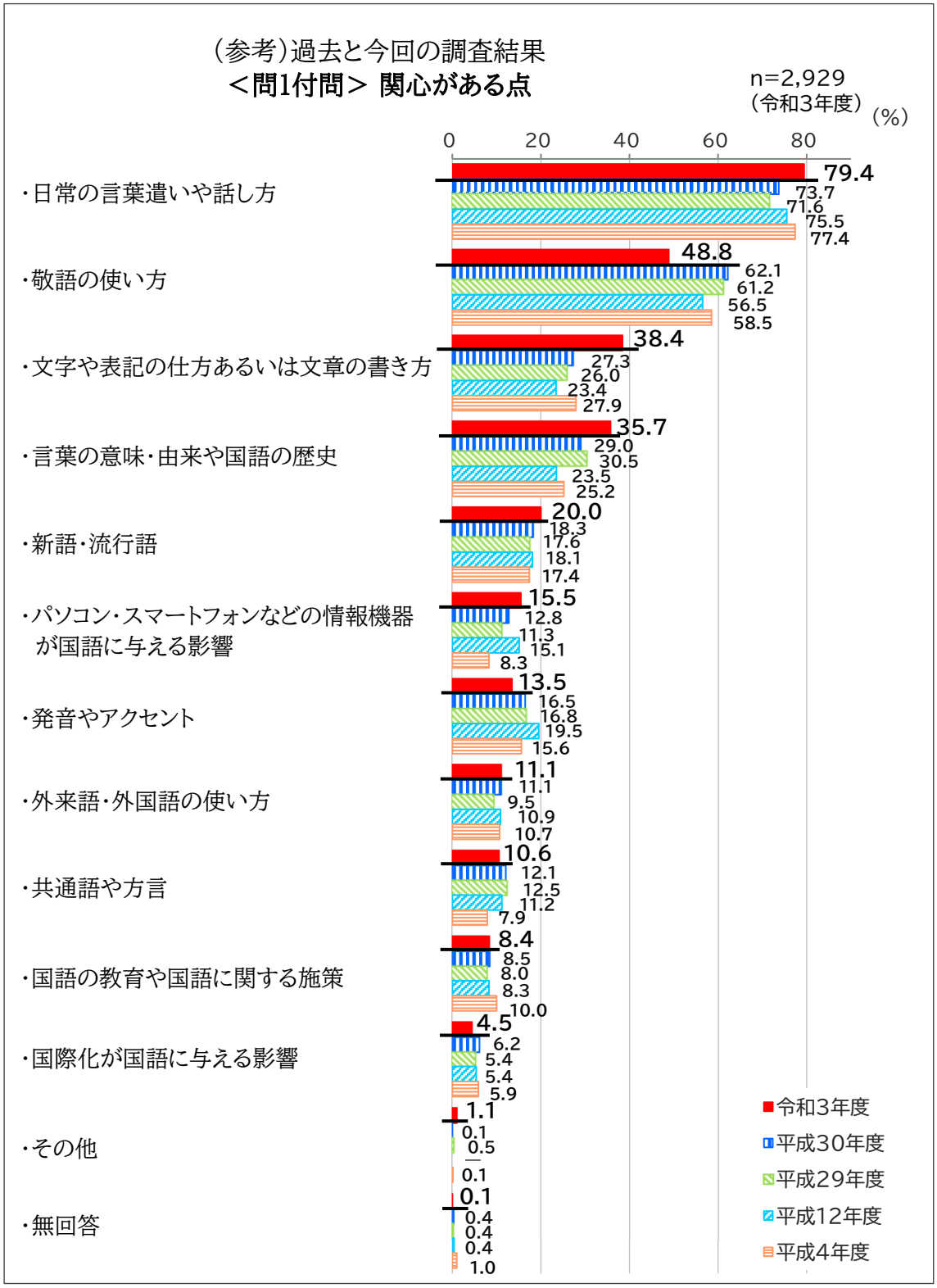
「日常の言葉遣いや話し方」（79.4%）の割合が他に比べて高く、約８割となっている。次いで「敬語の使い方」（48.8%）が５割弱、「文字や表記の仕方あるいは文章の書き方」（38.4%）、「言葉の意味・由来や国語の歴史」（35.7%）が３割台後半となっている。



〔 問１付問：（参考）過去の調査結果 〕

令和２年度から調査方法が変わったため、今回の調査結果との比較には注意が必要だが、過去の調査結果（平成 4、12、29、30 年度）を参考値として次のグラフに示す。

今回調査で 48.8％と、２番目に割合が高い「敬語の使い方」は、過去調査では５割台後半から６割台の間を推移していた。一方、今回調査で共に３割台後半となっている「文字や表記の仕方あるいは文章の書き方」（38.4％）、「言葉の意味・由来や国語の歴史」（35.7％）は、過去調査では、２割台から約３割の間を推移していた。



＊　調査方法の変更のため、令和元年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問１付問：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「日常の言葉遣いや話し方」は、16～19 歳が 73.0％と、ほかの年代より低くなっている。

「敬語の使い方」は、20 代が 63.6％と、ほかの年代より高くなっている一方、70 歳以上で 40.6％と低くなっている。

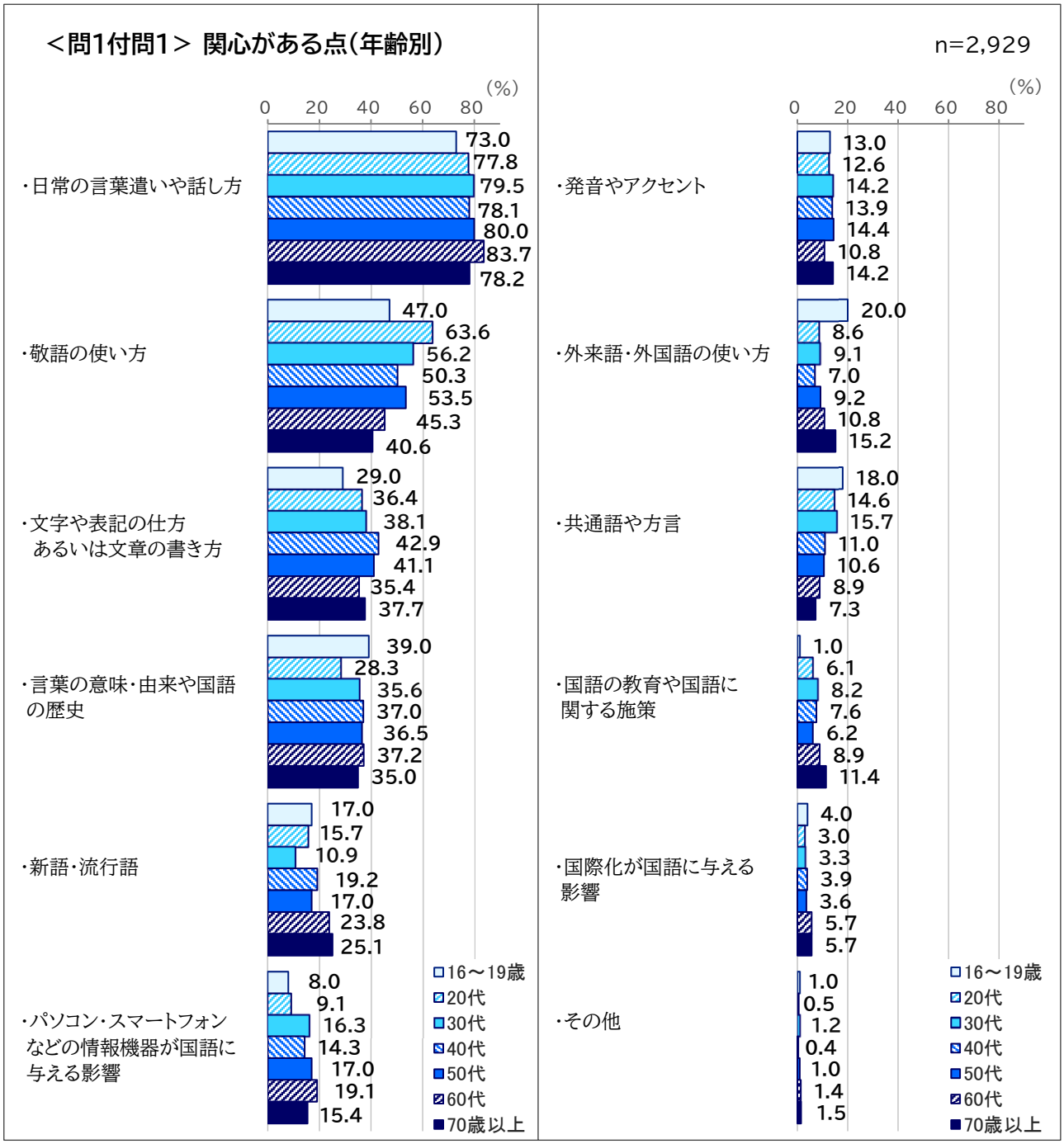
「文字や表記の仕方あるいは文章の書き方」は 16～19 歳で 29.0％と、ほかの年代より低くなっている。

「新語・流行語」は、30 代が 10.9％と、ほかの年代より低くなっている。

「パソコン・スマートフォンなどの情報機器が国語に与える影響」は、20 代以下が 10％未満と、ほかの年代より低くなっている。

「外来語・外国語の使い方」は、16～19 歳が 20.0％と、ほかの年代より高くなっている。

「共通語や方言」は、おおむね年代が下がるに従って割合が高くなる傾向にあり、16～19 歳が 18.0％となっている。



＜問２＞ 言葉や言葉の使い方について社会全般で課題があると思うか　（＊ p.8）

― 「あると思う」が８割台半ば ―

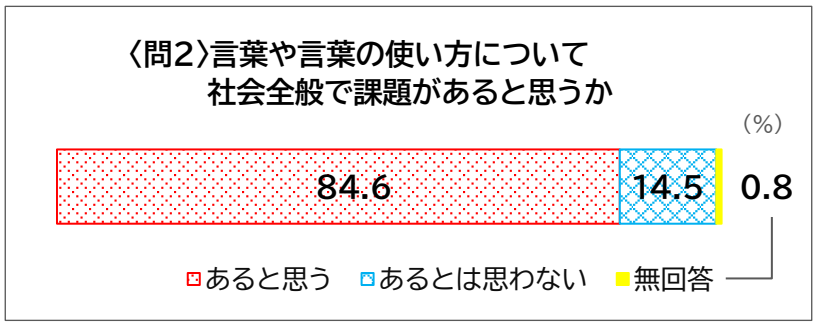
〔 問２：質問 〕

あなたは、言葉や言葉の使い方について、社会全般で、課題があると思いますか。それとも、そうは思いませんか。　（一つ回答）

〔 問２：全体の結果 〕

結果は、次のグラフのとおり。

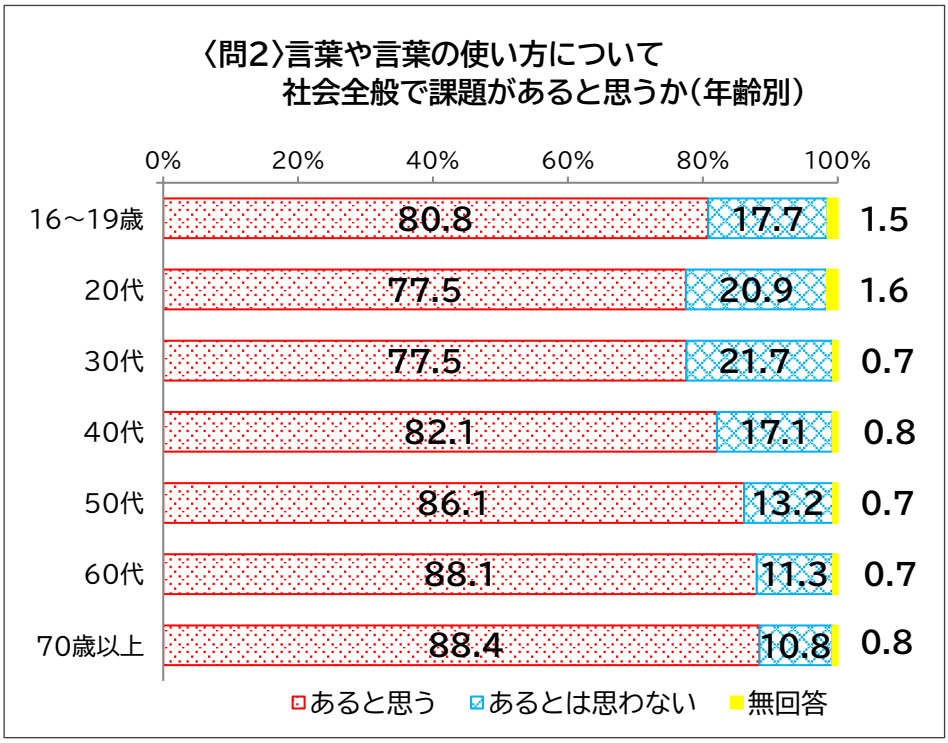
「あると思う」が 84.6%となっている一方、「あるとは思わない」が 14.5%となっている。



〔 問２：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「あるとは思わない」は、20～30 代が２割台と、ほかの年代より、やや高くなっている。



＜問２付問＞ 社会全般の課題　（＊ p.11）

― 「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができていないことが多い」が約６割と高い ―

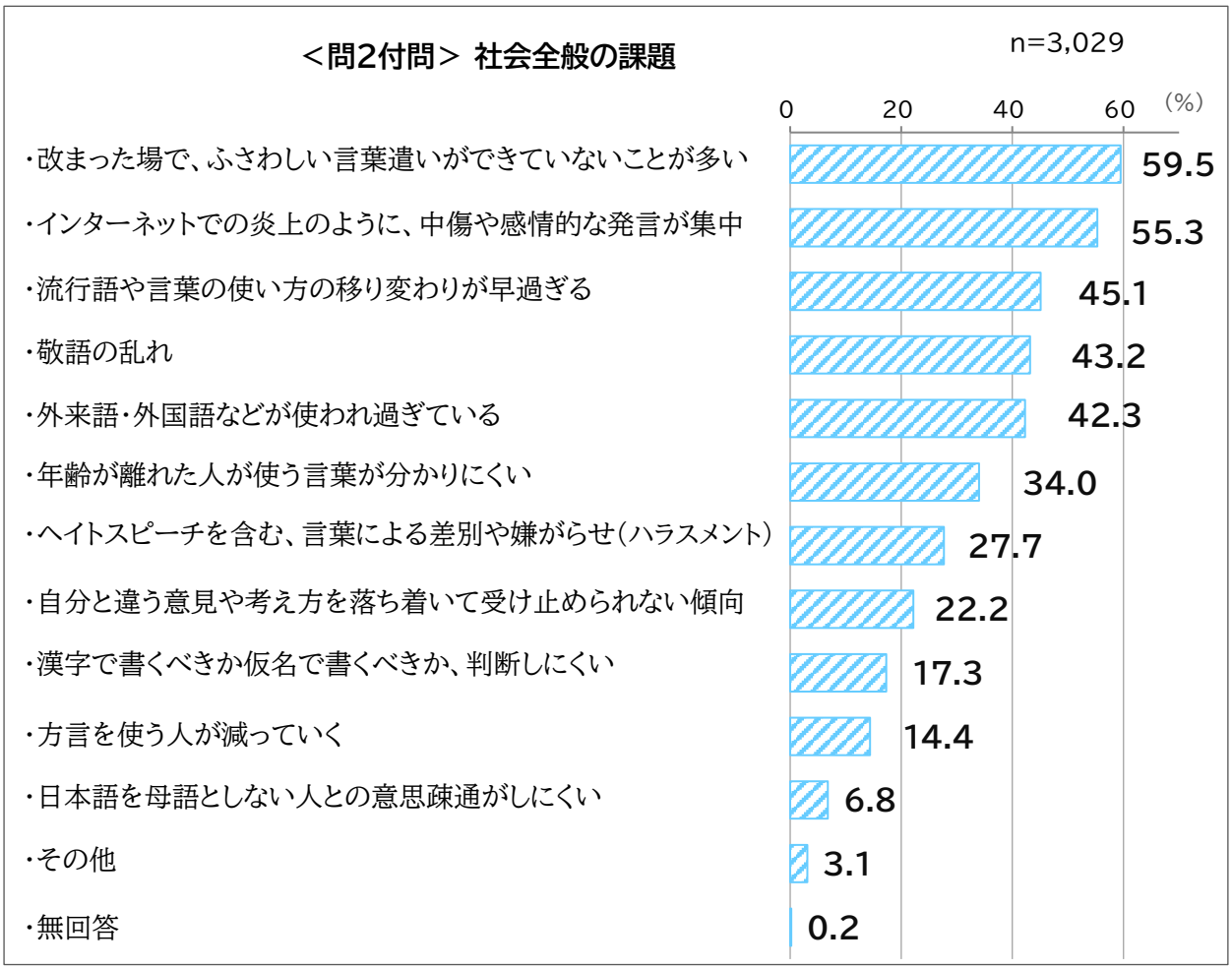
〔 問２付問：質問 〕

（問２で「あると思う」と答えた人（全体の 84.6%）に対して）
社会全般で、どのような課題があると思いますか。　（幾つでも回答）

〔 問２付問：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができていないことが多い」が 59.5%と最も高く、次いで「インターネットでの炎上のように、中傷や感情的な発言が集中すること」（55.3%）、「流行語や言葉の使い方の移り変わりが早過ぎる」（45.1%）、「敬語の乱れ」（43.2%）、「外来語・外国語などが使われ過ぎている」（42.3%）となっている。



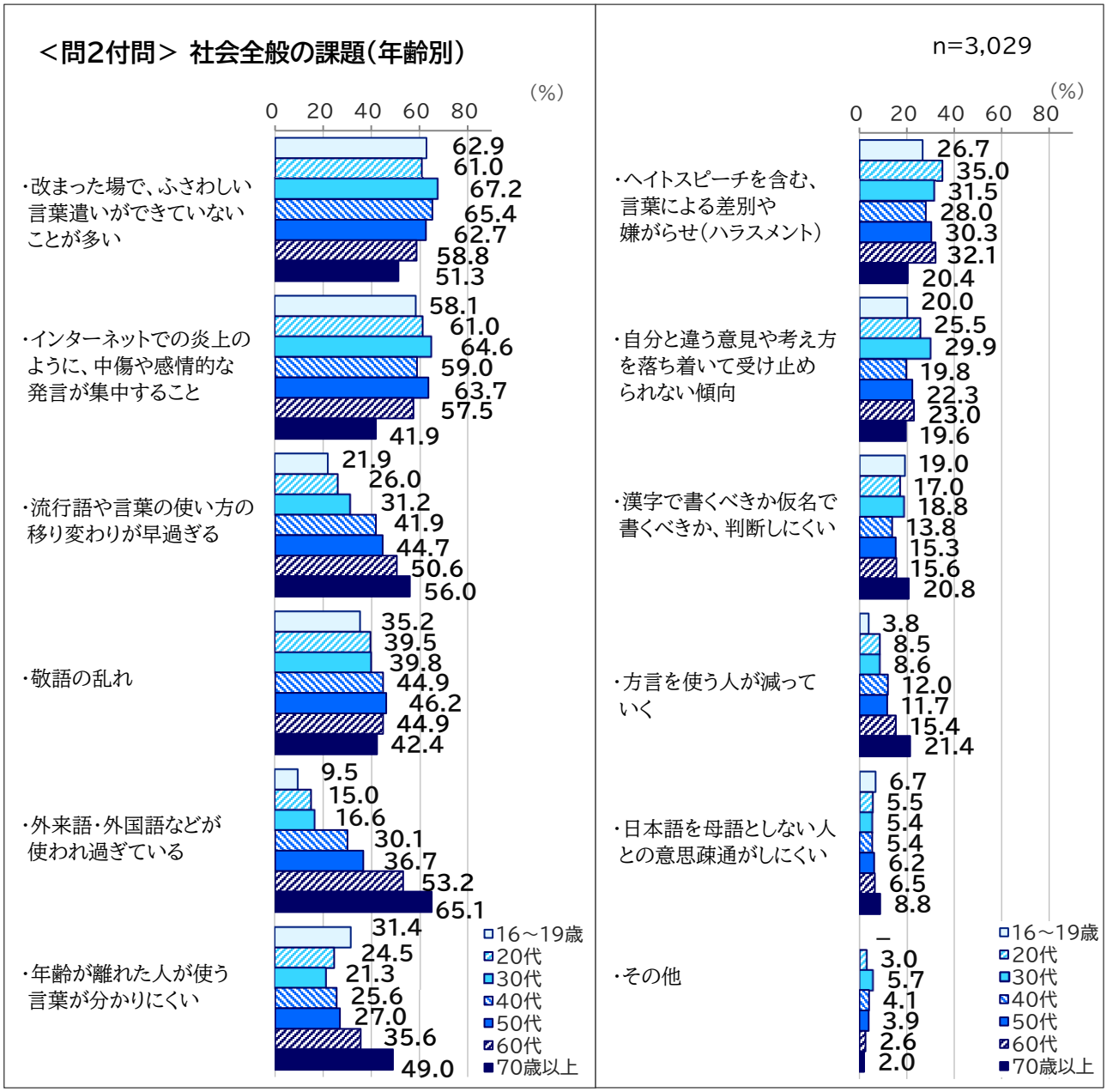
〔 問２付問：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができていないことが多い」は、30 代（67.2%）が最も高く、それより上の年代では、年齢が上がるに従って低くなっている。

「インターネットでの炎上のように、中傷や感情的な発言が集中すること」は、70 歳以上（41.9%）で、ほかの年代より低くなっている。

「流行語や言葉の使い方の移り変わりが早過ぎる」、「外来語・外国語などが使われ過ぎている」は、年代が上がるほど高くなっている。



＜問３＞ 言葉や言葉の使い方について自分自身に課題があると思うか （＊ p.14）

― 「あると思う」は６割台後半 ―

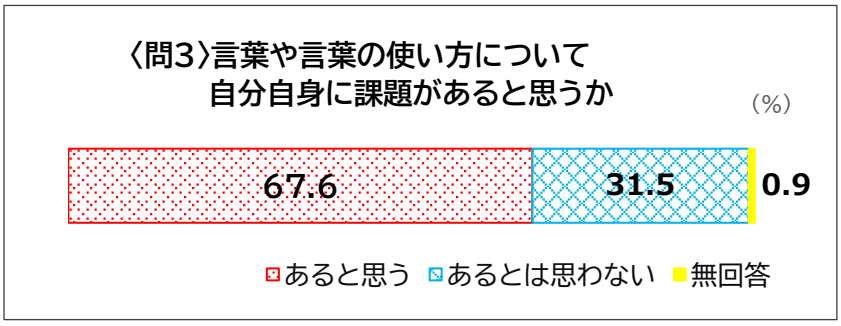
〔 問３：質問 〕

あなたは、言葉や言葉の使い方について、自分自身に、課題があると思いますか。それとも、そうは思いませんか。 （一つ回答）

〔 問３：全体の結果 〕

結果は、次のグラフのとおり。

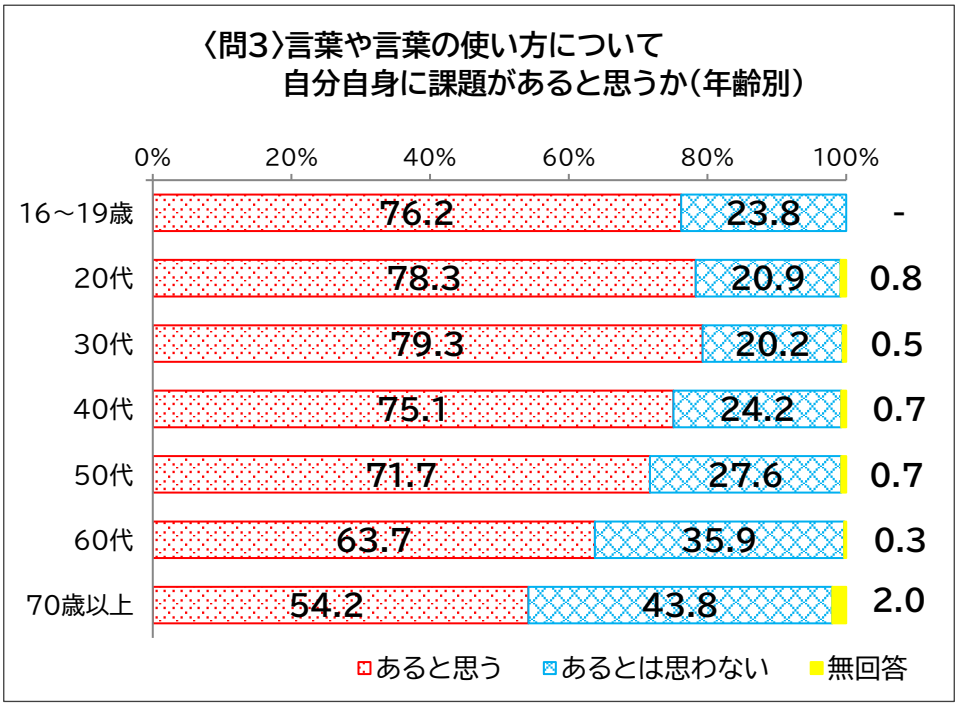
「あると思う」が 67.6%、「あるとは思わない」が 31.5%となっている。



〔 問３：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

おおむね年代が上がるに従って、言葉や言葉の使い方について、自分自身に、課題が「あると思う」と回答した人の割合が低くなる傾向にあり、70 歳以上で 54.2%となっている。



＜問３付問＞ 自分自身の課題 （＊ p.17）

― 「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができないことが多い」が６割台前半と最も高い ―

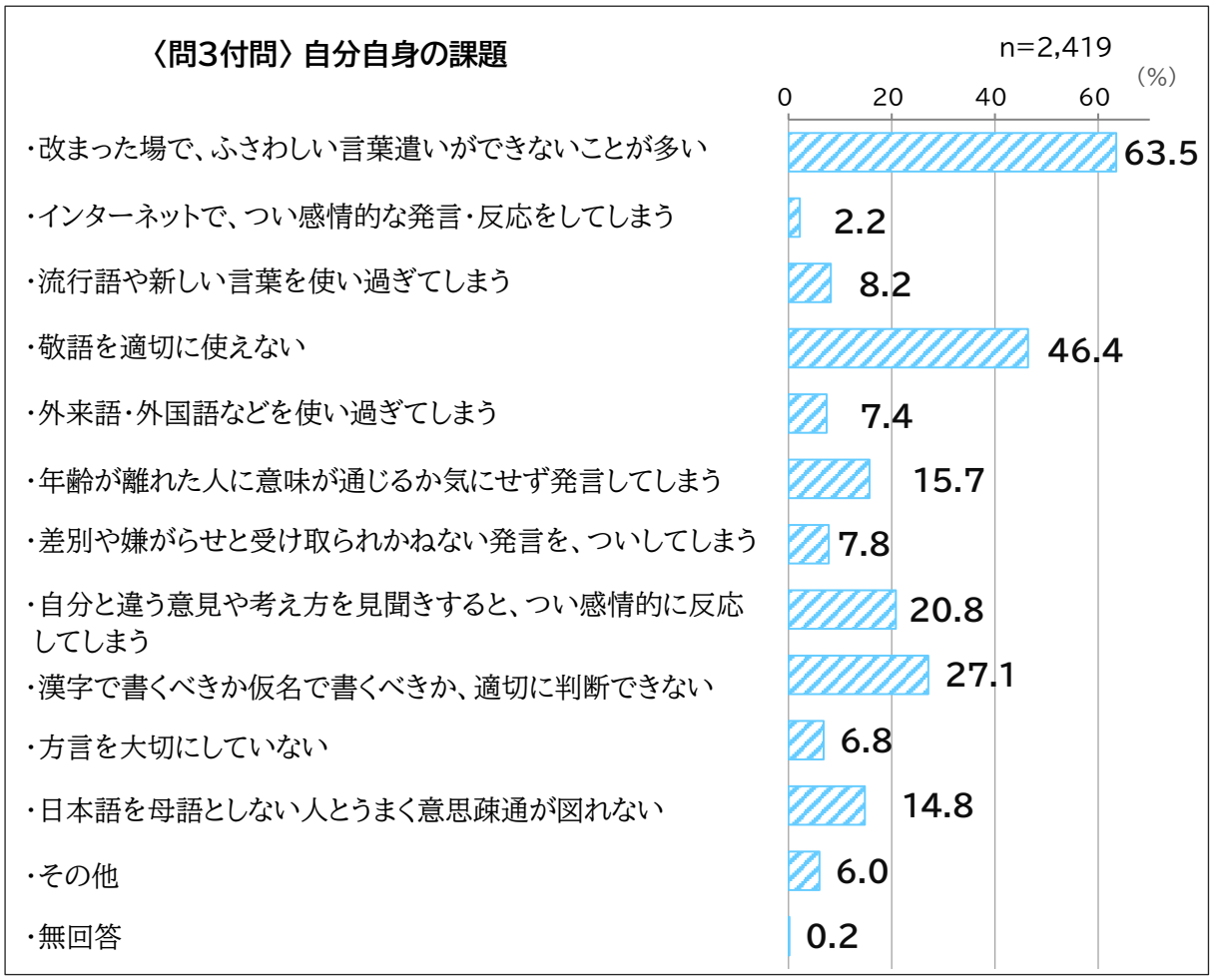
〔 問３付問：質問 〕

（問３で「あると思う」と答えた人（全体の 67.6%）に対して）
自分自身に、どのような課題があると思いますか。 （幾つでも回答）

〔 問３付問：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。（並び順は問２付問に合わせている。）

「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができないことが多い」が 63.5%と最も高く、次いで「敬語を適切に使えない」(46.4%)、「漢字で書くべきか仮名で書くべきか、適切に判断できない」(27.1%)、「自分と違う意見や考え方を見聞きすると、つい感情的に反応してしまう」(20.8%) となっている。



〔 問３付問：問２付問「社会全般の課題」との比較 〕

選択肢の内容が似ている問２付問「社会全般であると思う課題」（７ページ）と問３付問「自分自身にあると思う課題」との結果について比較する。

問２付問では「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができていないことが多い」を選択した人の割合が最も高く、59.5%となっていて、同様に、問３付問では「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができないことが多い」は 63.5%で最も高くなっている。

問２付問では「インターネットでの炎上のように、中傷や感情的な発言が集中すること」を選択した人の割合が２番目に高く、55.3%となっている一方、問３付問では「インターネットで、つい感情的な発言・反応をしてしまう」は 2.2%で、「その他」を除いて最も低くなっている。

〔 問３付問：年齢別の結果 〕

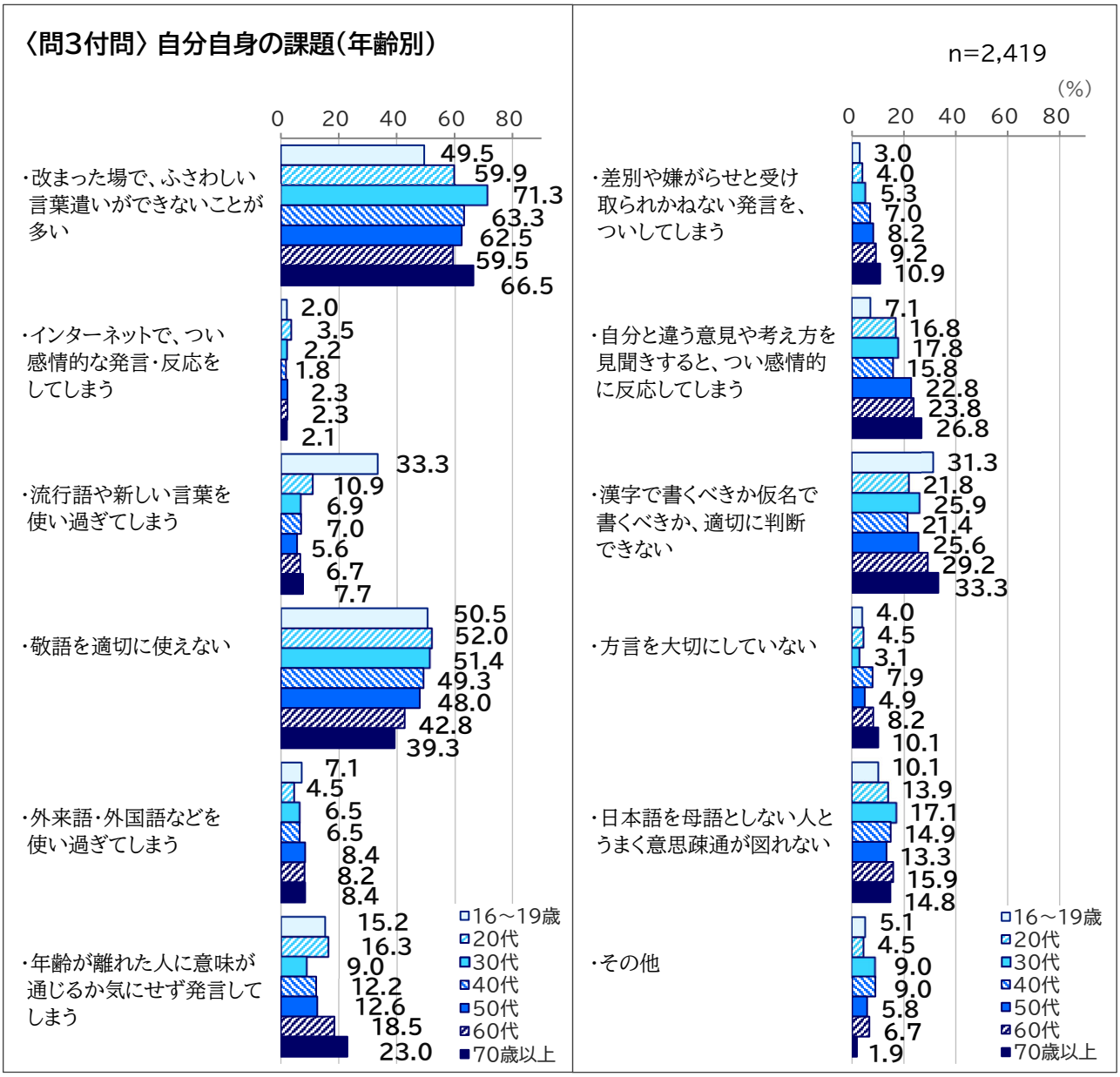
年齢別に見ると、次のグラフのとおり。（並び順は問２付問に合わせている。）

「改まった場で、ふさわしい言葉遣いができないことが多い」は、16～19 歳が 49.5％と、ほかの年代より低くなっている。

「流行語や新しい言葉を使い過ぎてしまう」は、16～19 歳が 33.3％と、ほかの年代より高くなっている。

「年齢が離れた人に意味が通じるか気にせず発言してしまう」は、70 歳以上が 23.0％と、ほかの年代より高くなっている。

「自分と違う意見や考え方を見聞きすると、つい感情的に反応してしまう」は、50 代以上が２割台と、40 代以下と比べて高くなっている。



Ⅱ　生活の変化とコミュニケーションに関する意識

＜問４＞ 情報機器の普及で言葉や言葉の使い方が影響を受けると思うか　（＊ p.19）

― 「影響を受けると思う」が約９割 ―

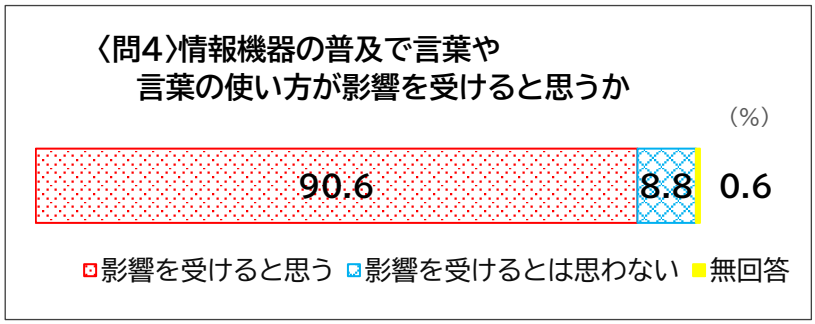
〔 問４：質問 〕

あなたは、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の普及によって、社会における言葉や言葉の使い方が影響を受けると思いますか。それとも、そうは思いませんか。　（一つ回答）

〔 問４：全体の結果 〕

結果は、次のグラフのとおり。

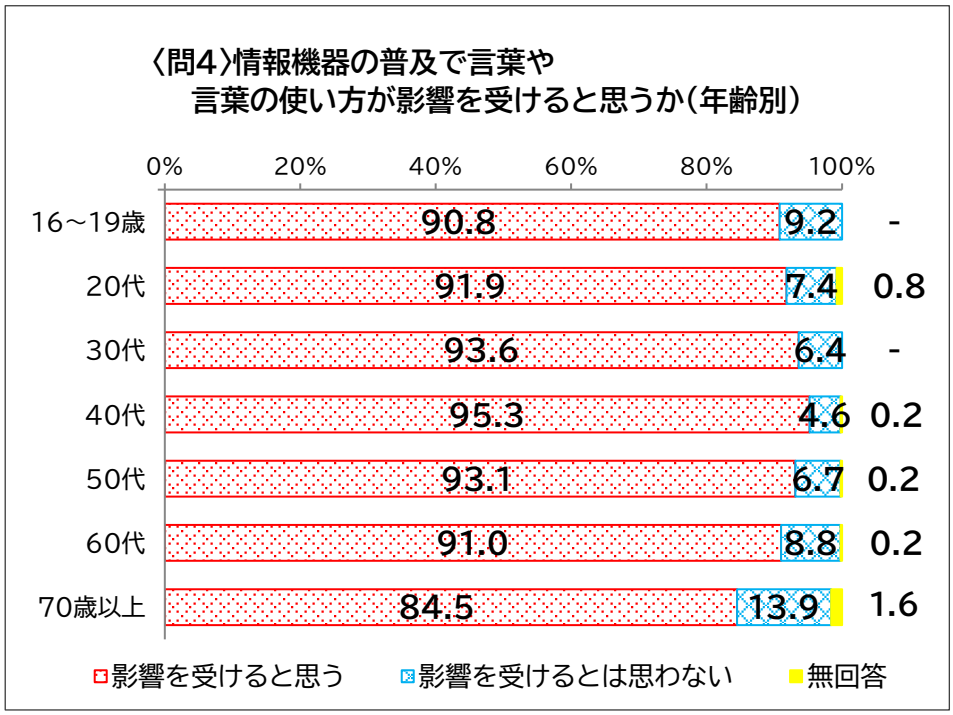
「影響を受けると思う」が 90.6%、「影響を受けるとは思わない」が 8.8%となっている。



〔 問４：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

70 歳以上を除くどの年代も、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の普及によって、社会における言葉や言葉の使い方が「影響を受けると思う」と回答した人の割合が９割を超えている。70 歳以上で 84.5%と、ほかの年代より、やや低くなっている。



＜問４付問＞ 情報機器の普及で受けると思う影響　（＊ p.22）

― 「手で字を書くことが減る」「漢字を手で正確に書く力が衰える」がそれぞれ約９割と高い ―

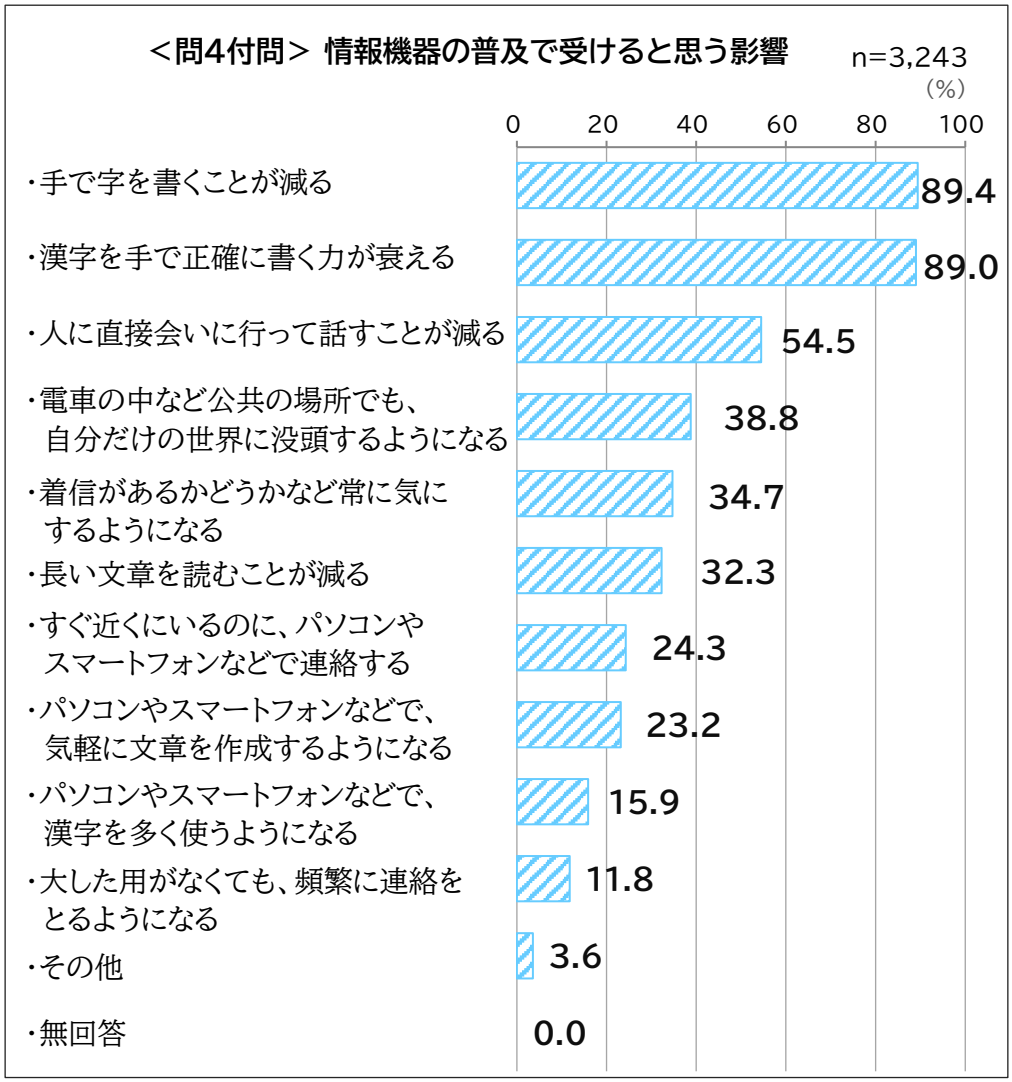
〔 問４付問：質問 〕

（問４で「影響を受けると思う」と答えた人（全体の 90.6%）に対して）
では、どのような形で影響があると思いますか。　（幾つでも回答）

〔 問４付問：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

「手で字を書くことが減る」が 89.4%と最も高く、次いで「漢字を手で正確に書く力が衰える」(89.0%)、「人に直接会いに行って話すことが減る」(54.5%)、「電車の中など公共の場所でも、自分だけの世界に没頭するようになる」(38.8%) となっている。



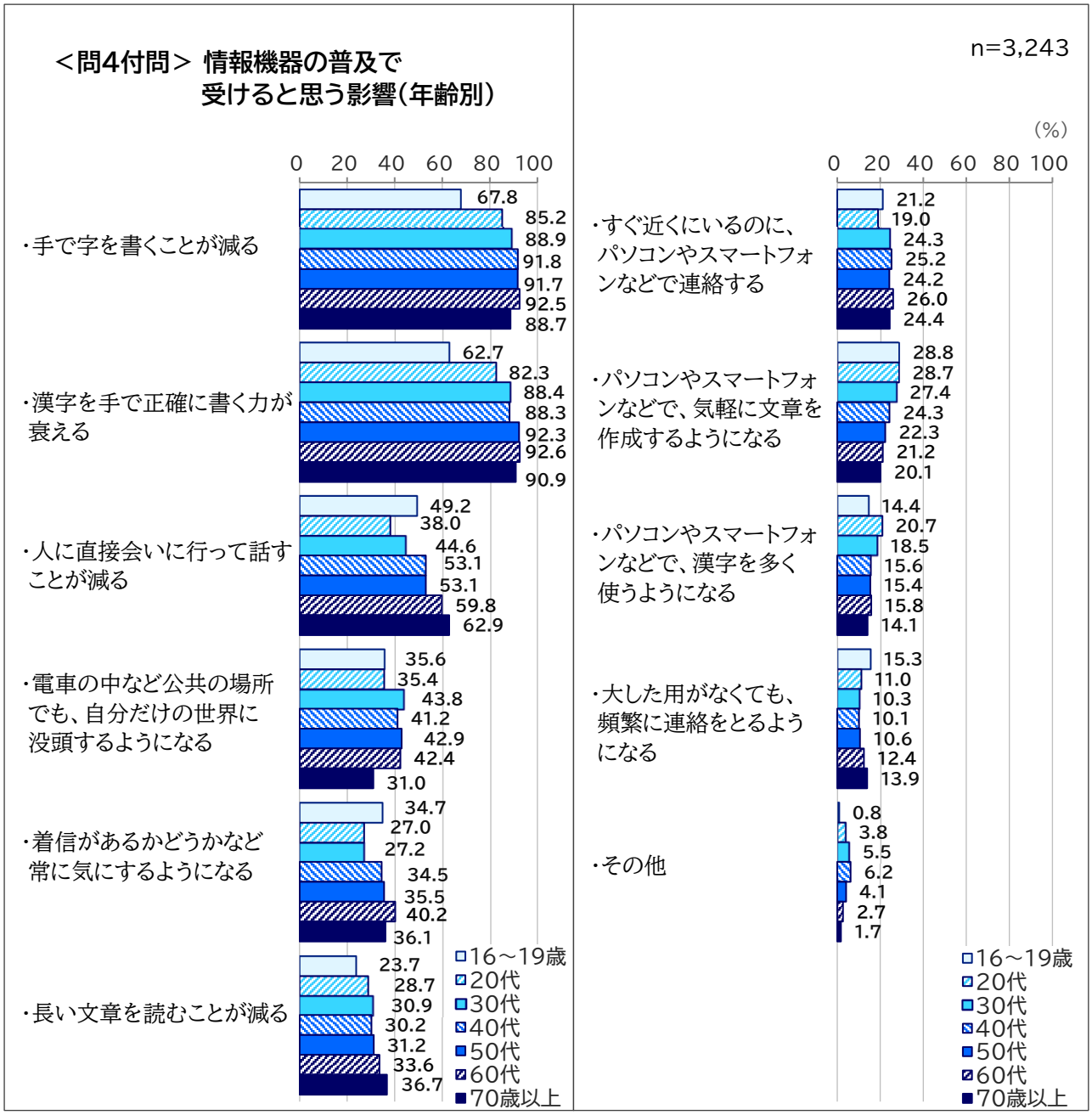
〔 問４付問：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「手で字を書くことが減る」と「漢字を手で正確に書く力が衰える」は、16～19 歳以外が８割台から９割台と高くなっている。一方、16～19 歳は６割台と、ほかの年代より低くなっている。

「人に直接会いに行って話すことが減る」は、20 代以上で年代が上がるほど高くなり、70 歳以上が 62.9%となっている。

「着信があるかどうかなど常に気にするようになる」は、20 代・30 代が２割台後半と、ほかの年代より、やや低くなっている。



＜問５＞　「人流」「ブレークスルー感染」等の言葉の使われ方の印象　（＊ p.24）

― 「おうち時間」「黙食」は「この言葉をそのまま使うのがいい」が６割台と高い ―

〔 問５：質問 〕

ここに挙げた（１）～（８）の言葉の使われ方について、どのように思いますか。　（一つずつ回答）

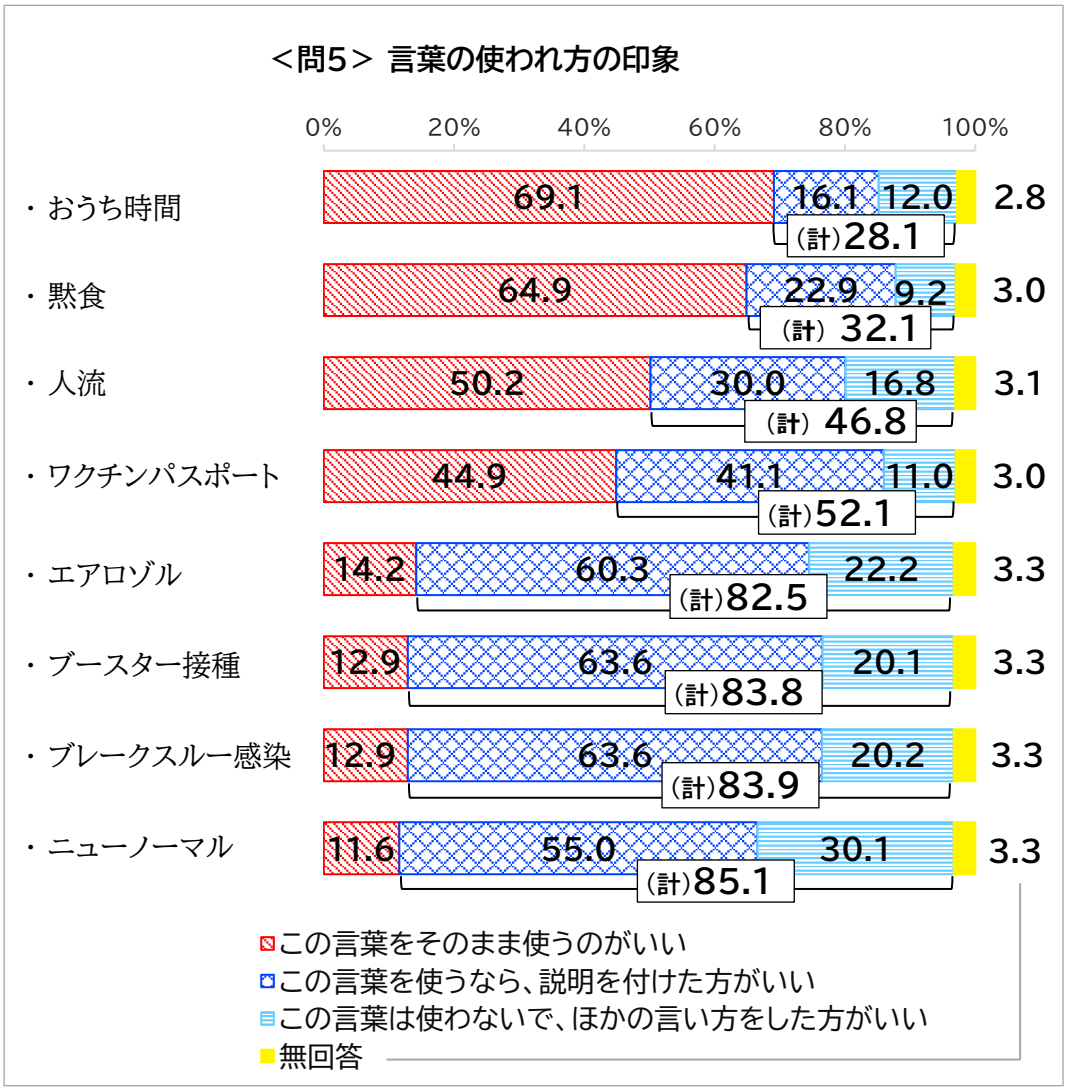
（１）人流　（２）黙食　（３）ブレークスルー感染　（４）ブースター接種
（５）ワクチンパスポート（６）ニューノーマル　（７）エアロゾル　（８）おうち時間

〔 問５：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

「この言葉をそのまま使うのがいい」を回答した人の割合は、「おうち時間」（69.1%）が最も高く、次いで、「黙食」（64.9%）、「人流」（50.2%）、「ワクチンパスポート」（44.9%）となっている。

一方、「この言葉を使うなら、説明を付けた方がいい」と「この言葉は使わないで、ほかの言い方をした方がいい」を合わせた「この言葉をそのまま使わない方がいい（計）」については、「ニューノーマル」（85.1%）、「ブレークスルー感染」（83.9%）、「ブースター接種」（83.8%）、「エアロゾル」（82.5%）が８割台と、高くなっている。



〔 問５：年齢別の結果 〕

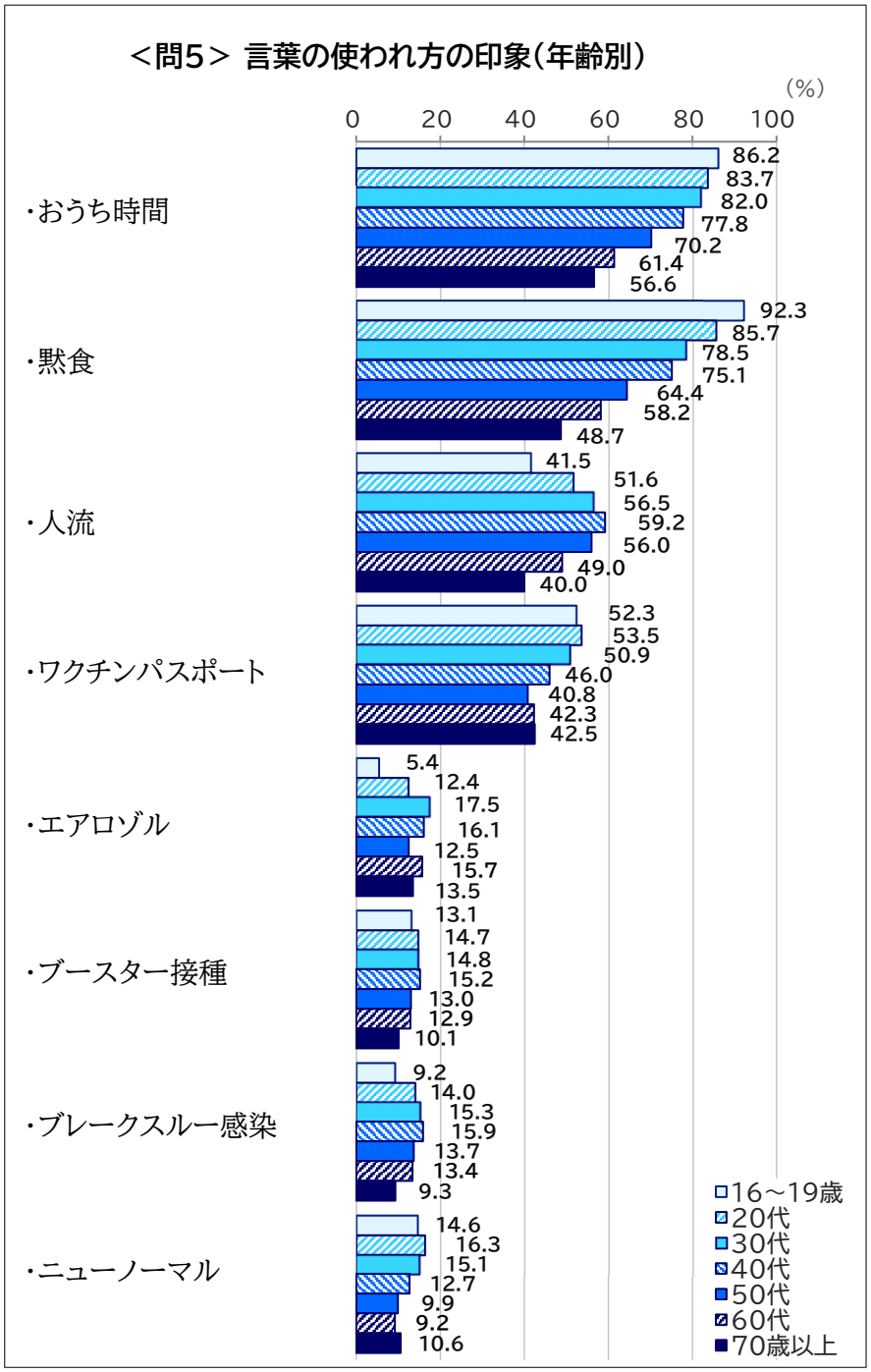
「この言葉をそのまま使うのがいい」を選択した人の割合を年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「おうち時間」、「黙食」では、年代による差が大きく、年代が上がるに従って低くなっている。「おうち時間」は 16～19 歳が 86.2%、70 歳以上が 56.6%で 30 ポイント、「黙食」は 16～19 歳が 92.3%、70 歳以上が 48.7%で 44 ポイントの差がある。

「人流」は、30 代～50 代が５割台後半と、ほかの年代より高くなっている一方、16～19 歳と 70 歳以上が約４割となっている。

「ワクチンパスポート」は、おおむね年代が上がるに従って低くなる傾向が見られる。

「エアロゾル」は、16～19 歳が 5.4%と、ほかの年代より低くなっている。



Ⅲ　ローマ字表記に関する意識

＜問６＞日本語がローマ字で書き表されているのを見ることがあるか　（＊ p.29）

― 「ある」が８割を超えている ―

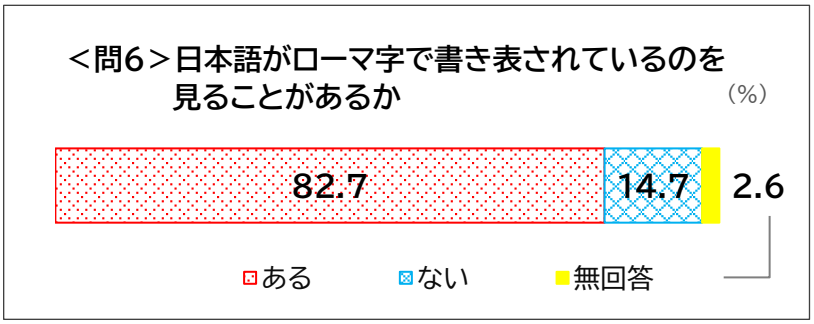
〔 問６：質問 〕

あなたは、ふだん、日本語がローマ字で書き表されている（例：「上野（うえの）」が「Ueno」、「堺（さかい）」が「Sakai」等）のを見ることがありますか。それとも、ありませんか。　（一つ回答）

〔 問６：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

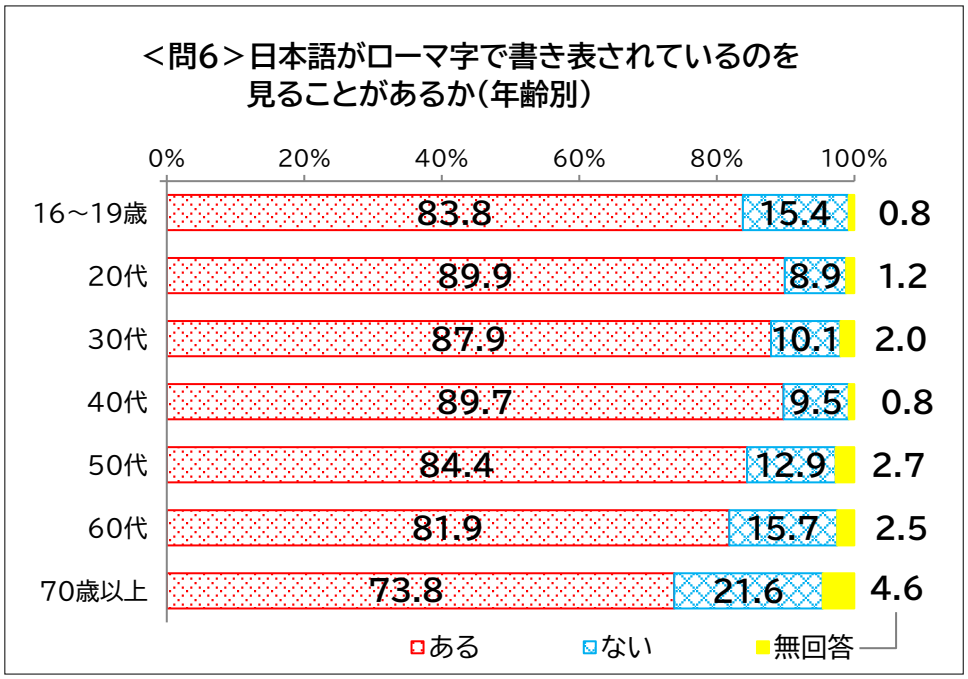
ふだん、日本語がローマ字で書き表されているのを見ることが「ある」が 82.7%となっている一方、「ない」が 14.7%となっている。



〔 問６：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

ふだん、日本語がローマ字で書き表されているのを見ることが「ない」と回答した人の割合は、70 歳以上で 21.6%と、ほかの年代より、やや高くなっている。



＜問６付問＞ 日本語がローマ字で書き表されているのを見る場所 （＊ p.31）

― 「駅や道路の表示などにある日本の駅名・地名」が９割台半ばと最も高い ―

〔 問６付問：質問 〕

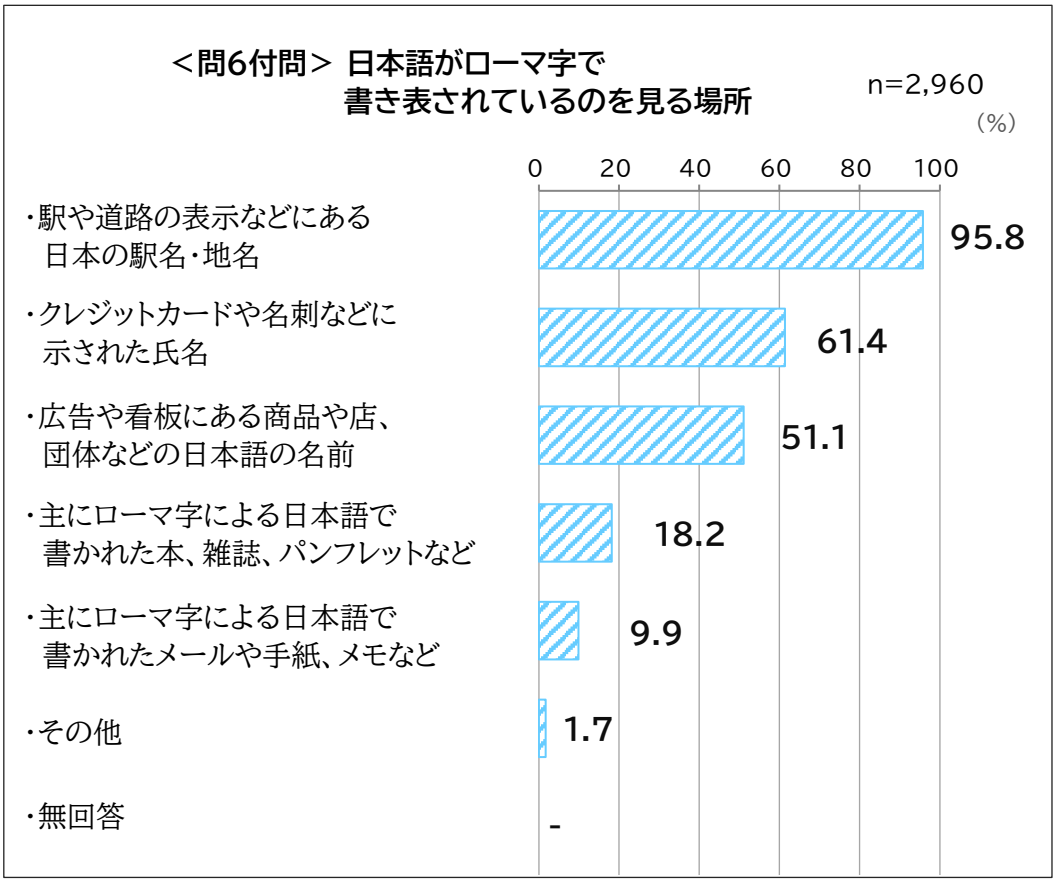
（問６で「ある」と答えた人（全体の 82.7%）に対して）

ふだん、どのようなところで日本語がローマ字で書き表されているのを見ますか。 （幾つでも回答）

〔 問６付問：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

「駅や道路の表示などにある日本の駅名・地名」が 95.8%と最も高く、次いで「クレジットカードや名刺などに示された氏名」(61.4%)、「公告や看板にある商品や店、団体などの日本語の名前」(51.1%)となっている。



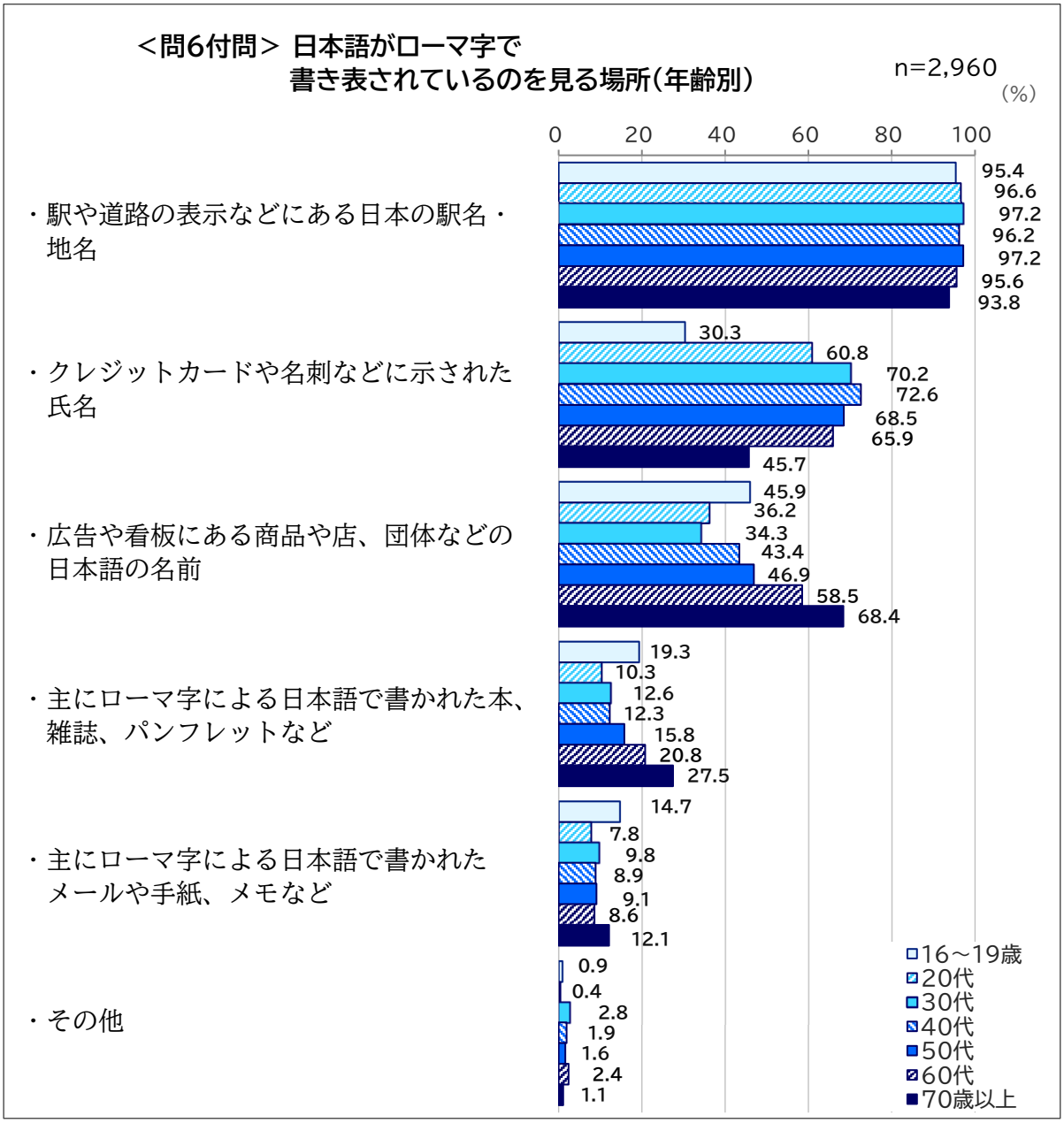
〔 問６付問：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「クレジットカードや名刺などに示された氏名」は、16～19 歳が 30.3%、70 歳以上が 45.7%と、ほかの年代より低くなっている。

「公告や看板にある商品や店、団体などの日本語の名前」は、60 歳以上が５割台から６割台と、ほかの年代より高くなっている。

「主にローマ字による日本語で書かれた本、雑誌、パンフレットなど」は、70 歳以上で 27.5%と、ほかの年代より高くなっている。



＜問７＞情報機器における日本語入力でのローマ字入力の使用　（＊ p.33）

― 「よく使う」「時々使う」を合わせた「使う（計）」が５割台半ば ―

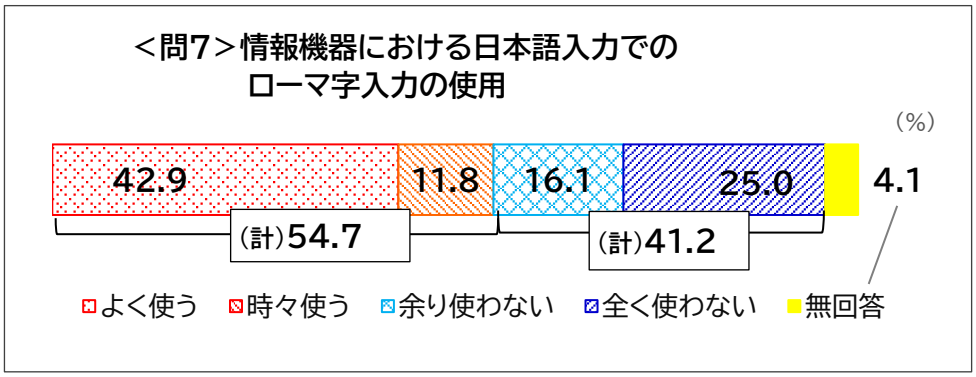
〔 問７：質問 〕

あなたは、パソコンやスマートフォンなどの情報機器で日本語を入力するとき、ローマ字入力（「ことば」と表示させるために「kotoba（KOTOBA）」と入力するような方法）を使いますか。　（一つ回答）

〔 問７：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

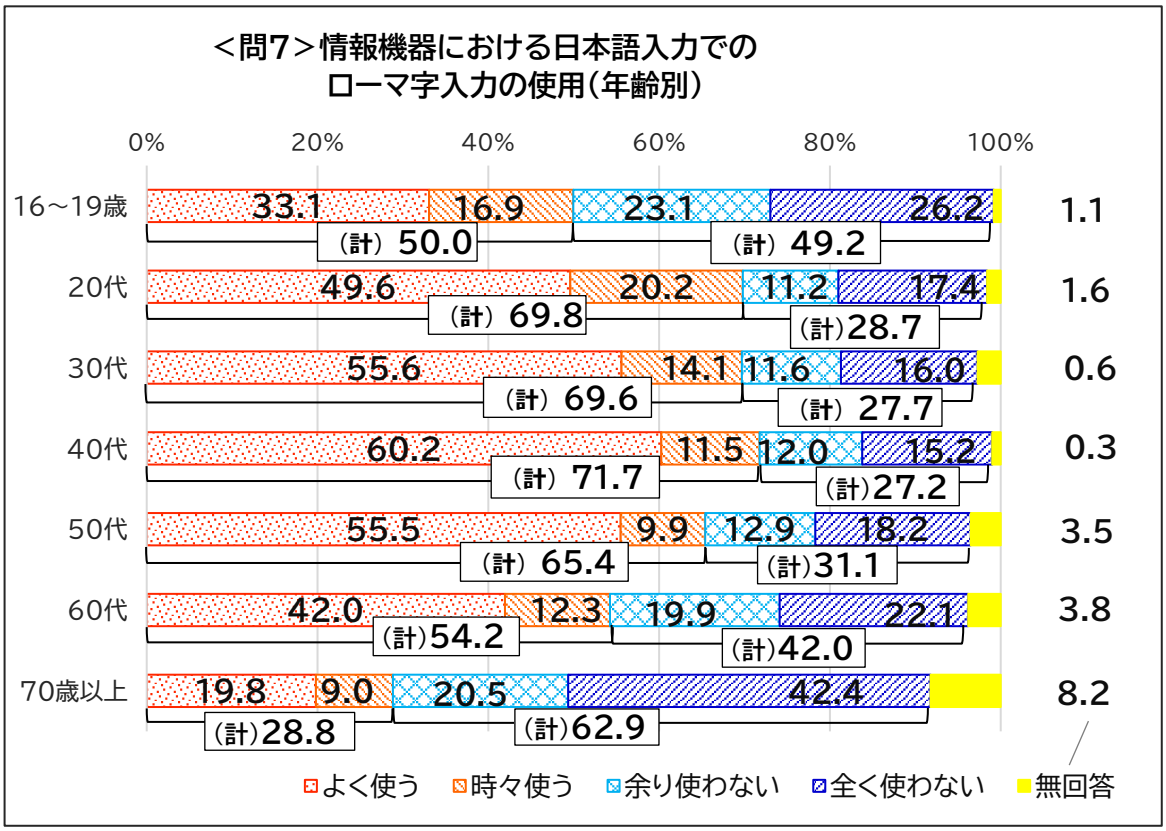
「よく使う」（42.9%）と「時々使う」（11.8%）を合わせた「使う（計）」が 54.7%、「全く使わない」（25.0%）と「余り使わない」（16.1%）を合わせた「使わない（計）」が 41.2%となっている。



〔 問７：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「よく使う」「時々使う」を合わせた「使う（計）」は、20 代～50 代で６割台後半から７割台と、ほかの年代より高くなっている一方、70 歳以上で 28.8%と、ほかの年代より低くなっている。



＜問８＞日本語をローマ字で書き表すことがあるか　（＊ p.35）

― 「ない」が７割台半ばと高い ―

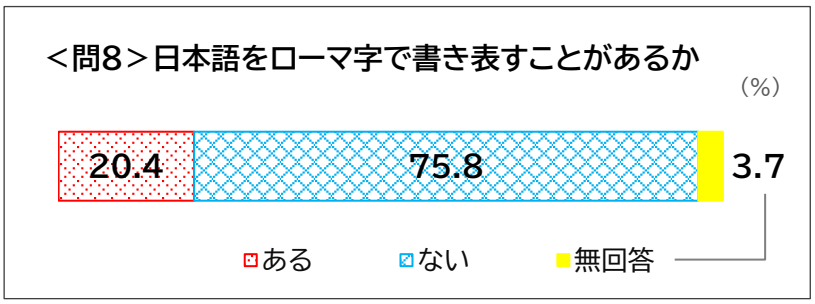
〔 問８：質問 〕

あなたは、ふだん、日本語をローマ字で書き表すこと（情報機器におけるローマ字入力を除く。）がありますか。それとも、ありませんか。　（一つ回答）

〔 問８：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

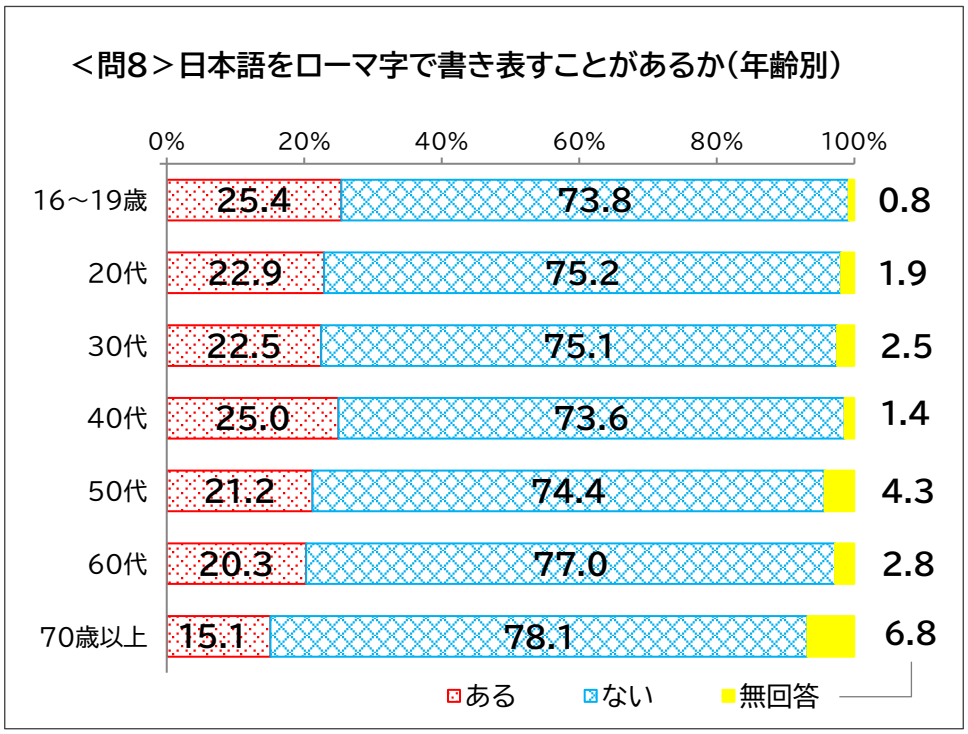
ふだん、日本語をローマ字で書き表すことが「ある」が 20.4%となっている一方、「ない」が 75.8%となっている。



〔 問８：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

ふだん、日本語をローマ字で書き表すことが「ある」は、70 歳以上で 15.1%と、ほかの年代より、やや低くなっている。



＜問８付問＞ 日本語をローマ字で書き表す場面 （＊ p.37）

― 「氏名をローマ字で書くよう求められたとき」が７割台後半と最も高い ―

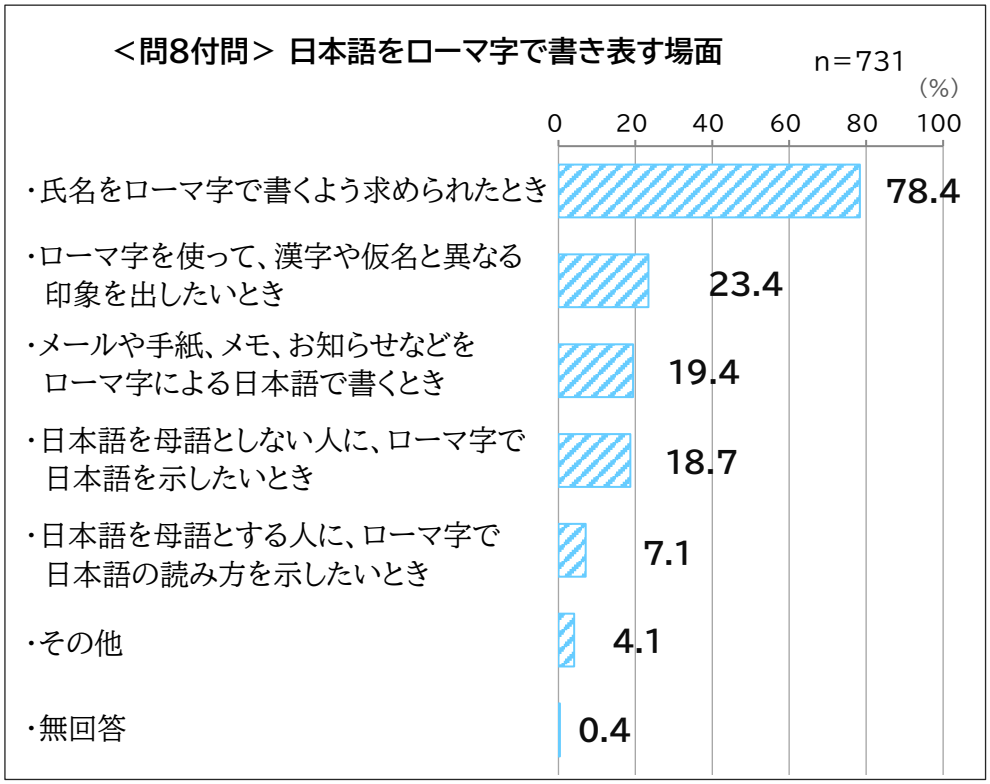
〔 問８付問：質問 〕

（問８で「ある」と答えた人（全体の 20.4%）に対して）
ふだん、どのようなときに日本語をローマ字で書き表しますか。 （幾つでも回答）

〔 問８付問：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

「氏名をローマ字で書くよう求められたとき」が 78.4%と最も高く、次いで「ローマ字を使って、漢字や仮名と異なる印象を出したいとき」（23.4%）となっている。



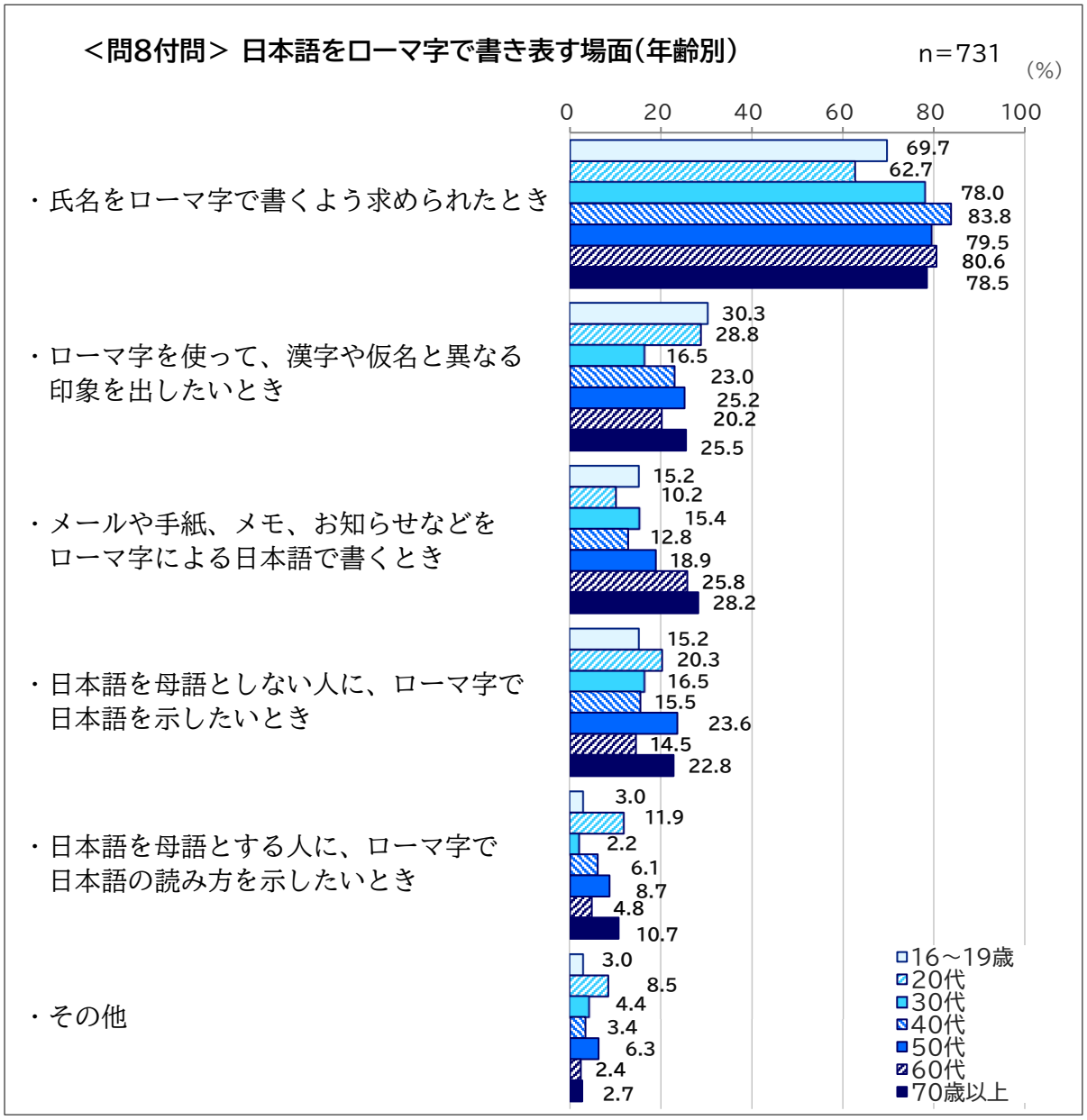
〔 問８付問：年齢別の結果 〕

年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

「氏名をローマ字で書くよう求められたとき」は、20 代以下が６割台と、ほかの年代より低くなっている。

一方、「ローマ字を使って、漢字や仮名と異なる印象を出したいとき」は、20 代以下が約３割と、ほかの年代より高くなっている。

「メールや手紙、メモ、お知らせなどをローマ字による日本語で書くとき」は、60 代以上で２割台後半と、ほかの年代より高くなっている。



＜問９＞どのローマ字表記を使うか（「明石（あかし）」「厚木（あつぎ）」など）（＊ p.38）

― 「Akashi」が 75.4%、「Atsugi」が 61.0%と、「Akasi」、「Atugi」を上回っている ―

〔 問９：質問 〕

次の（１）～（11）の言葉を、あなたがローマ字で書き表すとしたら、ここに挙げた中ではどの書き表し方を使いますか。　（一つずつ回答）

（１）明石（あかし）　（２）宇治（うじ）　（３）愛知（あいち）　（４）厚木（あつぎ）
（５）岐阜（ぎふ）　（６）五所川原（ごしょがわら）　（７）御宿（おんじゅく）
（８）抹茶（まっちゃ）　（９）丹波（たんば）　（10）田園（でんえん）　（11）会津（あいづ）

※　「ローマ字のつづり方」（昭和 29 年内閣告示）では、第 1 表にはいわゆる訓令式のつづり方が、第 2 表にはいわゆるヘボン式（表の上から 5 列目まで）と日本式（6 列目以下）のつづり方のうち、訓令式と異なるものが示されている。

〔 問９：全体の結果・年齢別の結果〕

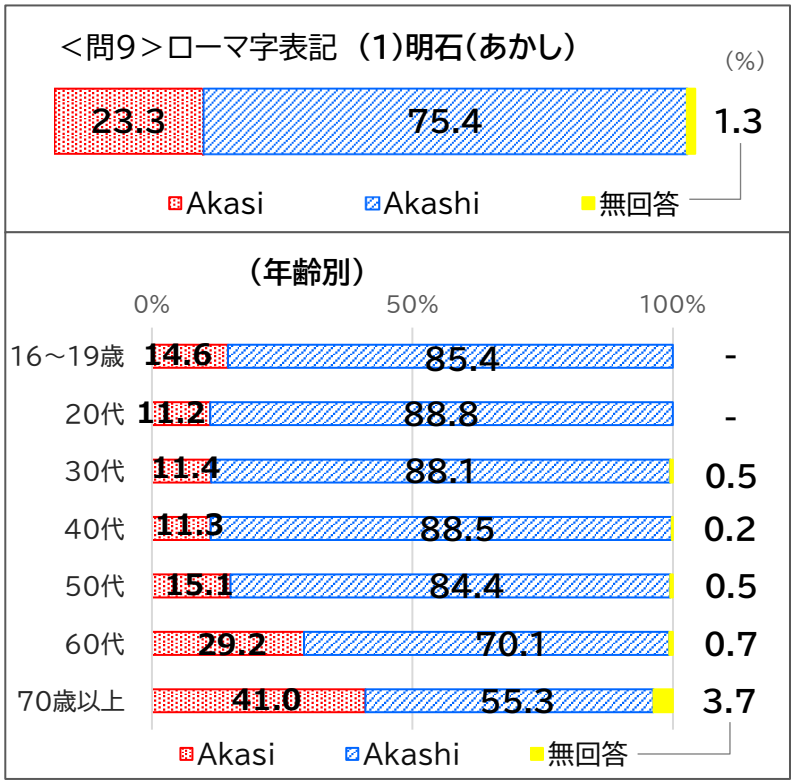
結果はそれぞれ次のグラフのとおり。

（１）「明石（あかし）」

「Akashi」と回答した人の割合が 75.4%、「Akasi」の割合が　23.3%となっている。

年齢別に見ると、「Akasi」が 70 歳以上で 41.0%と、ほかの年代より高くなっている。

※ 「Akasi」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Akashi」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。

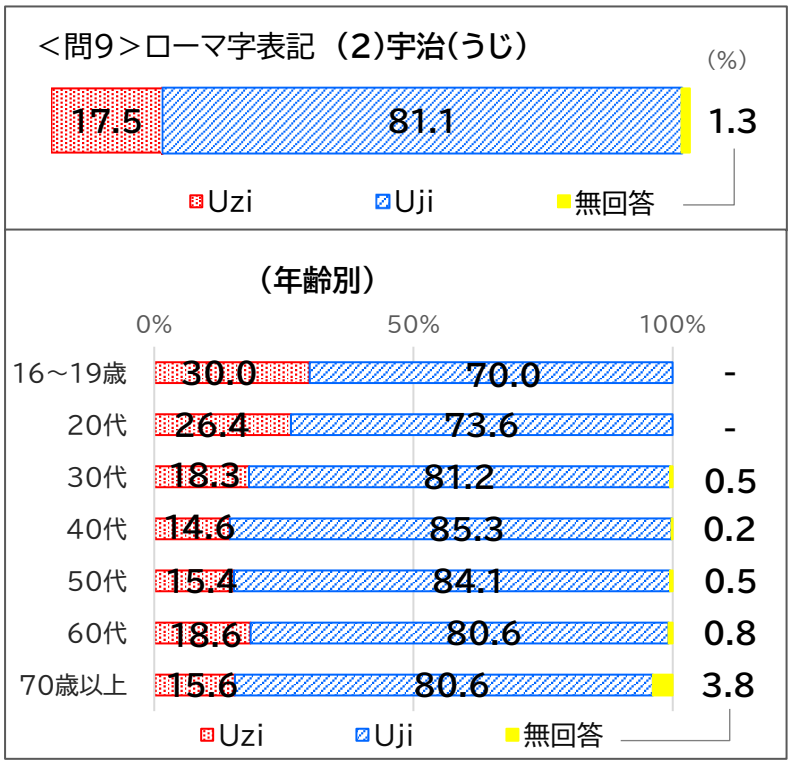


（２）「宇治（うじ）」

「Uji」と回答した人の割合が81.1%、「Uzi」の割合が17.5%となっている。

年齢別に見ると、「Uzi」が20代以下で２割台後半～３割と、ほかの年代より高くなっている。

※「Uzi」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Uji」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。

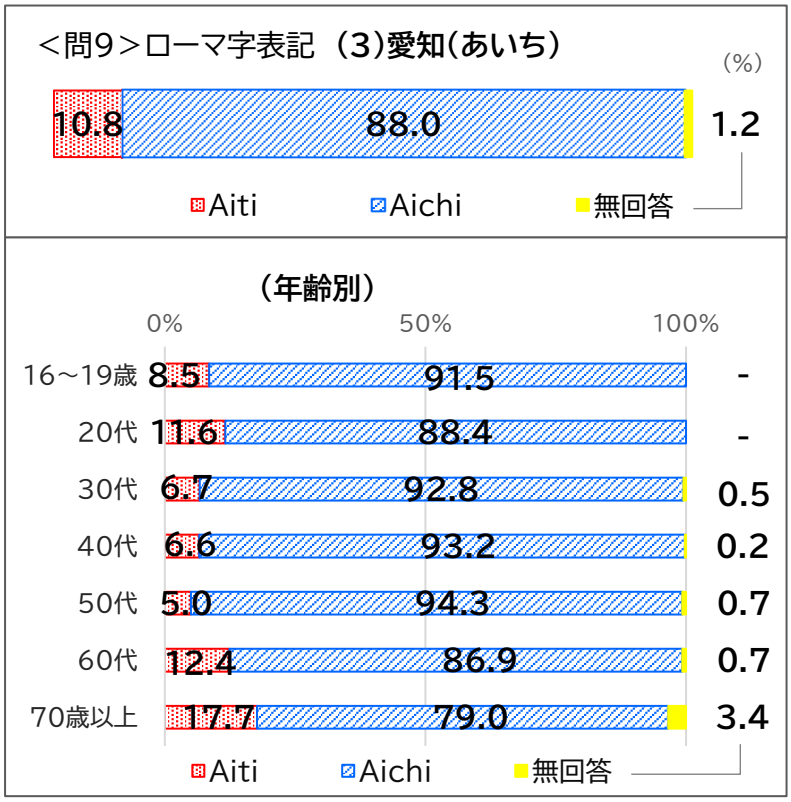


（３）「愛知（あいち）」

「Aichi」と回答した人の割合が88.0%、「Aiti」の割合が10.8%となっている。

年齢別に見ると、「Aiti」が70歳以上で17.7%と、ほかの年代より、やや高くなっている。

※「Aiti」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Aichi」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。

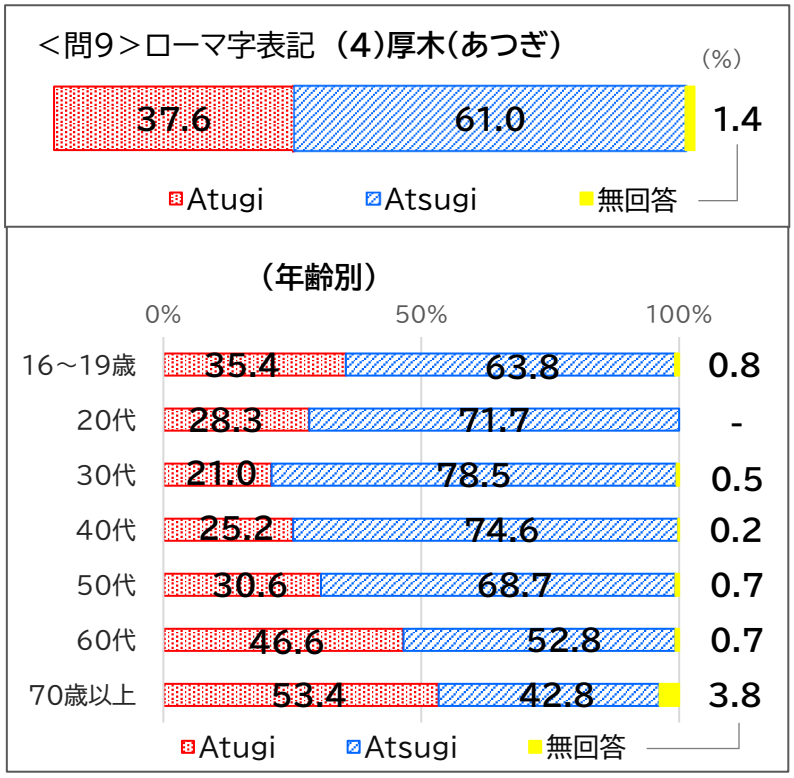


（４）「厚木（あつぎ）」

「Atsugi」と回答した人の割合が61.0%、「Atugi」の割合が37.6%となっている。

年齢別に見ると、ほとんどの年代で「Atsugi」の割合が「Atugi」より高くなっているが、70代以上で「Atugi」が53.4%と「Atsugi」より高くなっている。

※「Atugi」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Atsugi」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。

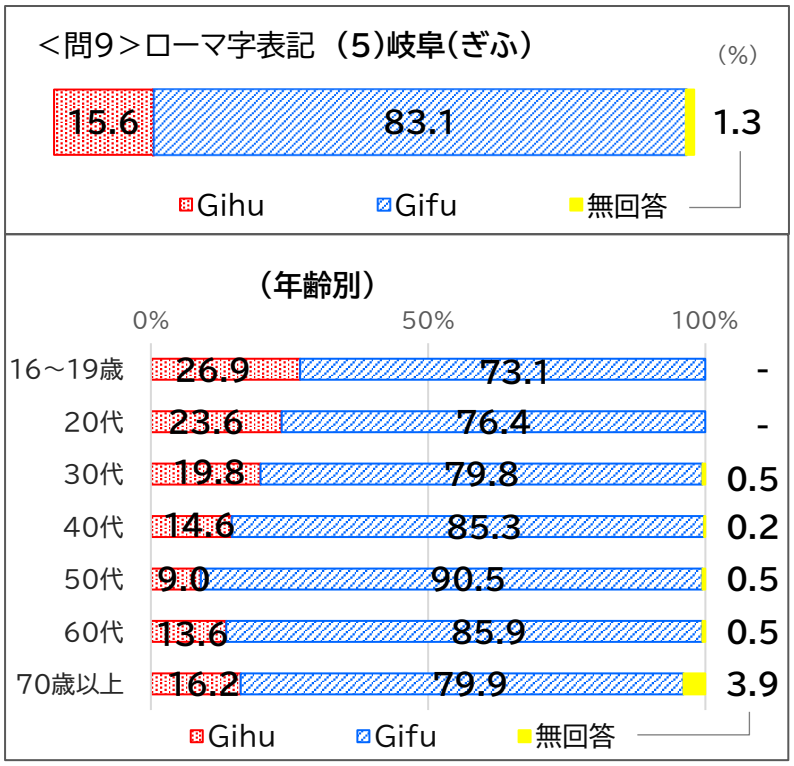


（５）「岐阜（ぎふ）」

「Gifu」と回答した人の割合が83.1%、「Gihu」の割合が15.6%となっている。

年齢別に見ると、「Gihu」が20代以下で２割台と、ほかの年代より、やや高くなっている。

※「Gihu」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Gifu」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。

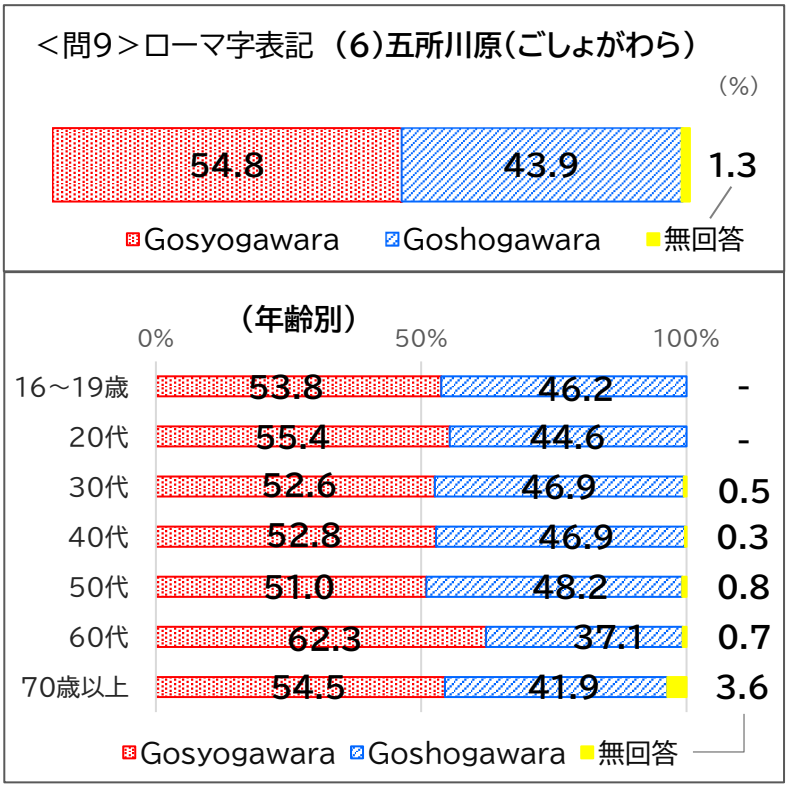


（６）「五所川原（ごしょがわら）」

「Gosyogawara」と回答した人の割合が 54.8%、「Goshogawara」の割合が 43.9%となっている。

年齢別に見ると、「Gosyogawara」が 60 代で 62.3%と、ほかの年代より、やや高くなっている。

※「Gosyogawara」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Goshogawara」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。

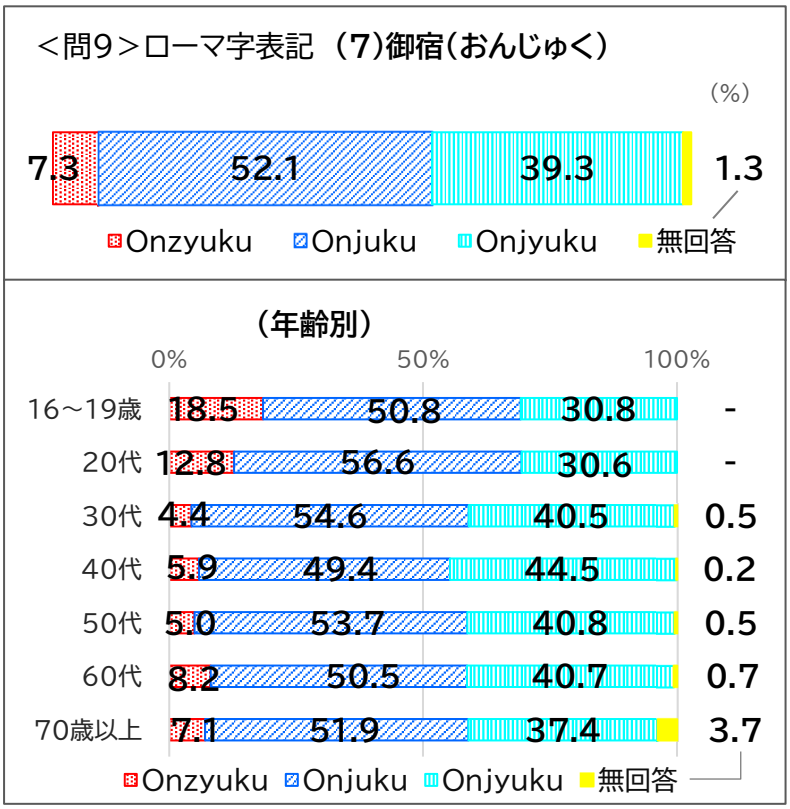


（７）「御宿（おんじゅく）」

「Onjuku」と回答した人の割合が 52.1%、「Onjyuku」の割合が 39.3%、「Onzyuku」の割合が 7.3%となっている。

年齢別に見ると、「Onjyuku」が 40 代で 44.5%、「Onzyuku」が 16～19 歳で 18.5%と、ほかの年代より高くなっている。

※「Onzyuku」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Onjuku」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。「Onjyuku」は電子機器のローマ字入力で用いられることがある。



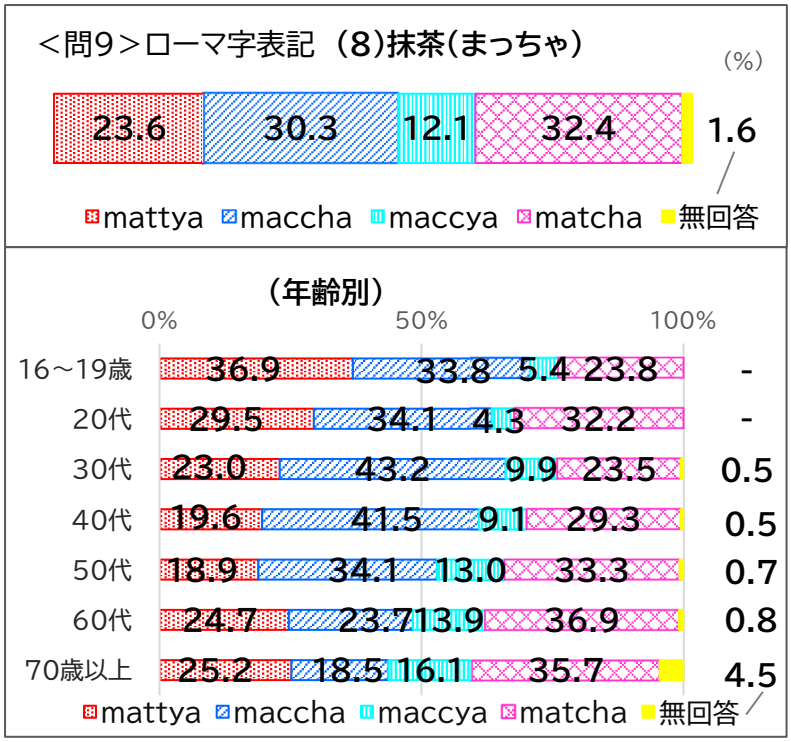
（８）「抹茶（まっちゃ）」

「matcha」と回答した人の割合が32.4%、「maccha」が30.3%、「mattya」が23.6%、「maccya」が12.1%となっている。

年齢別に見ると、60代以上で「maccha」と回答した割合が１割台後半から２割台と、「matcha」より低くなっているが、ほかの年代では「maccha」の方が「matcha」より高くなっている。

16～19歳では、「mattya」が36.9%と、ほかの選択肢より高くなっている。

※「mattya」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「maccha」は第２表（いわゆるヘボン式）による表記。「matcha」はいわゆるヘボン式の表記で用いられることがある。「maccya」は電子機器のローマ字入力で用いられることがある。

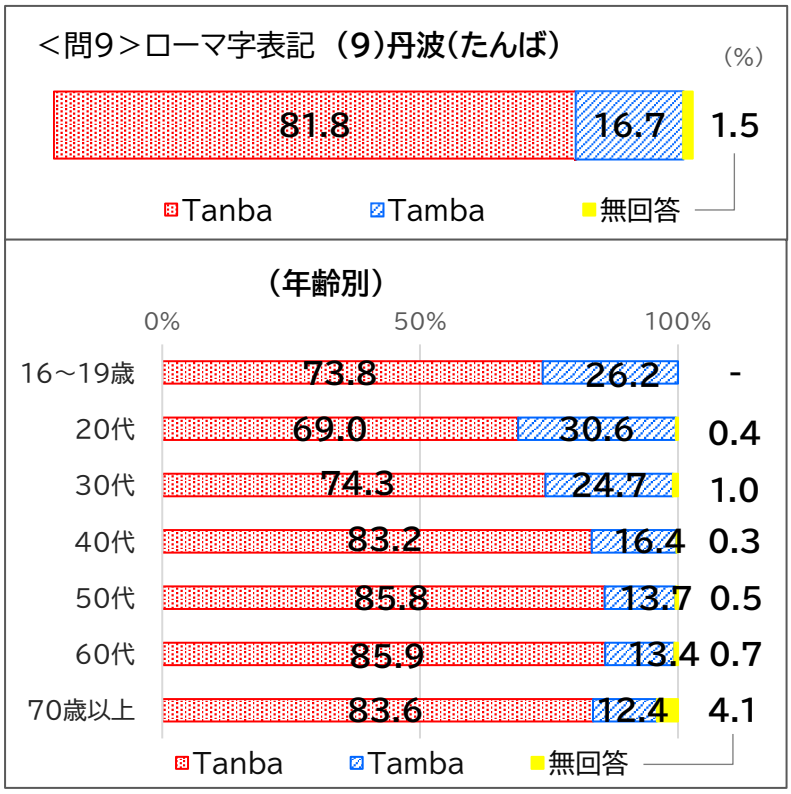


（９）「丹波（たんば）」

「Tanba」と回答した人の割合が81.8%、「Tamba」の割合が16.7%となっている。

年齢別に見ると、「Tamba」が30代以下で２割台半ばから３割台と、ほかの年代より高くなっている。

※「Tanba」は「ローマ字のつづり方」による表記。「Tamba」はいわゆるヘボン式の表記で用いられることがある。

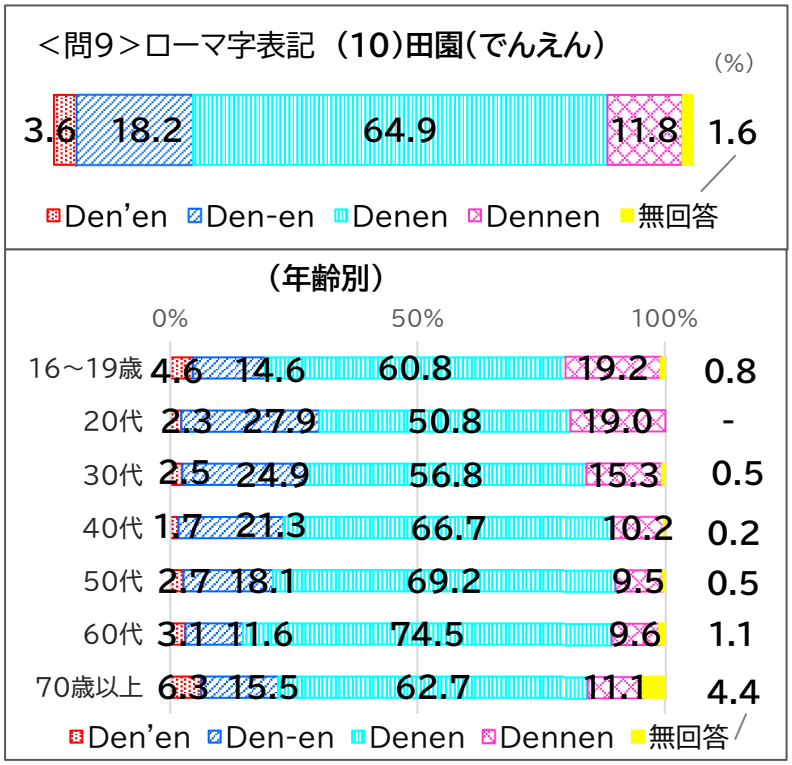


(10)「田園（でんえん）」

「Denen」と回答した人の割合が64.9%、「Den-en」が18.2%、「Dennen」が11.8%、「Den'en」が3.6%となっている。

年齢別に見ると、「Den-en」が20代で27.9%、「Dennen」が20代以下で約２割と、ほかの年代より高くなっている。

※「Den'en」は「ローマ字のつづり方」による表記。「Den-en」はいわゆるヘボン式の表記で用いられることがある。「Denen」「Dennen」は電子機器のローマ字入力で用いられることがある。

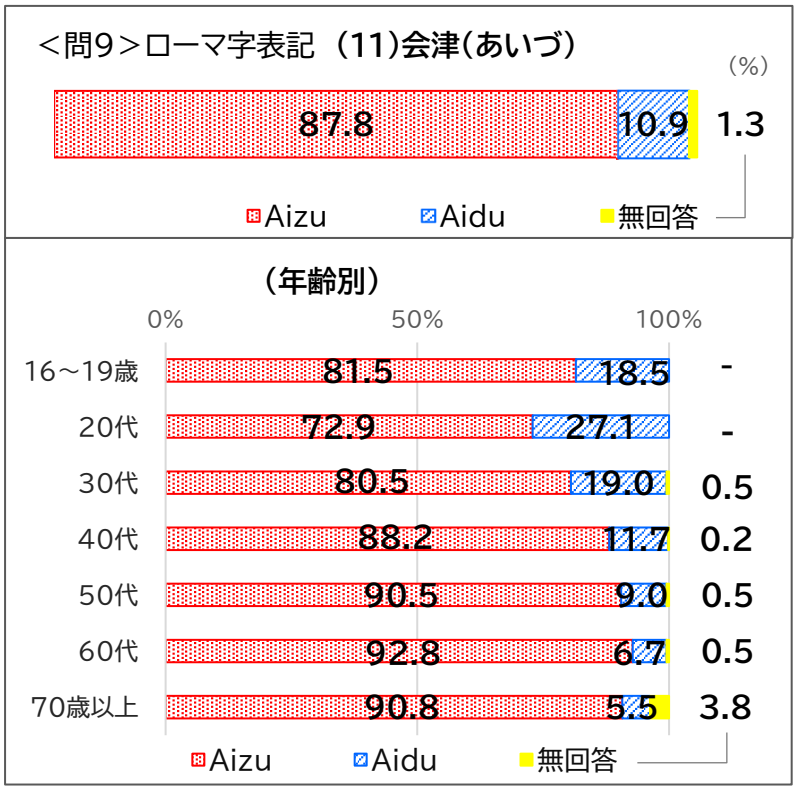


(11)「会津（あいづ）」

「Aizu」と回答した人の割合が87.8%、「Aidu」の割合が10.9%となっている。

年齢別に見ると、「Aidu」が20代で27.1%と、ほかの年代より高くなっている。

※「Aizu」は「ローマ字のつづり方」の第１表、「Aidu」は第２表（いわゆる日本式）による表記。



Ⅳ　言葉遣いに対する印象や、慣用句等の認識と使用

＜問 10＞気になる言葉（「なにげに」「ぶっちゃけ」等を使うことがあるか）　（＊ p.46）

― 「すごい速い」は「使うことがある」が約６割 ―

〔 問 10：質問 〕

あなたは、ここに挙げた（１）～（７）の下線部分の言い方を使うことがありますか。　（一つずつ回答）

（１）「そうではなくて」ということを、「ちがくて」と言う
（２）「あの人は走るのがすごく速い」ということを、「あの人は走るのがすごい速い」と言う
（３）「あの人みたいになりたい」ということを、「あの人みたくなりたい」と言う
（４）「なにげなくそうした」ということを、「なにげにそうした」と言う
（５）「中途半端でない」ということを、「半端ない」と言う
（６）「正直なところまずい」ということを、「ぶっちゃけまずい」と言う
（７）「実態などを分かりやすく示すこと」を、「見える化」と言う

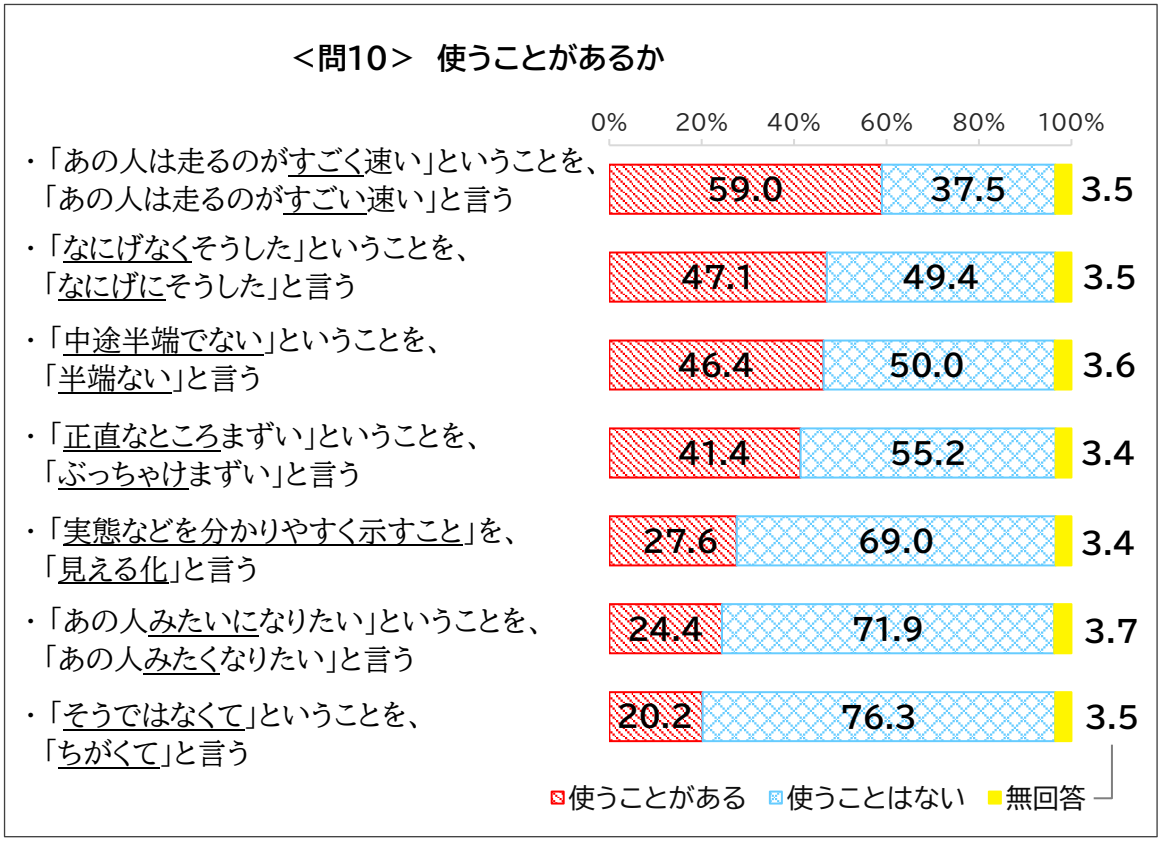
※　調査した七つの言葉は、文法的に破格とされる場合があるもの等の中から、新しい使い方や意味が辞書に記載されてきたものを取り上げた。

〔 問 10：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。

下線部の言い方を「使うことがある」と回答した人の割合は、「あの人は走るのがすごい速い」が 59.0%、「なにげにそうした」が 47.1%、「半端ない」が 46.4%、「ぶっちゃけまずい」が 41.4%となっている。

一方、「使うことはない」と回答した人の割合は、「ちがくて」が 76.3%、「あの人みたくなりたい」が 71.9%、「見える化」が 69.0%となっている。



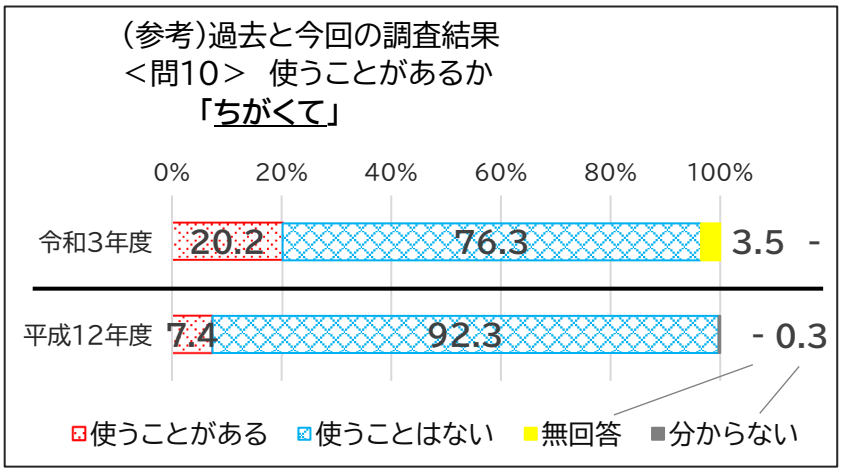
〔 問 10：（参考）過去の調査結果 〕

令和２年度から調査方法が変わったため、今回の調査結果との比較には注意が必要だが、過去の調査結果（平成 8,12,15,23 年度）を参考値として次のグラフに示す。

なお、(6)「ぶっちゃけまずい」と(7)「見える化」については、今回調査で初めて尋ねた。

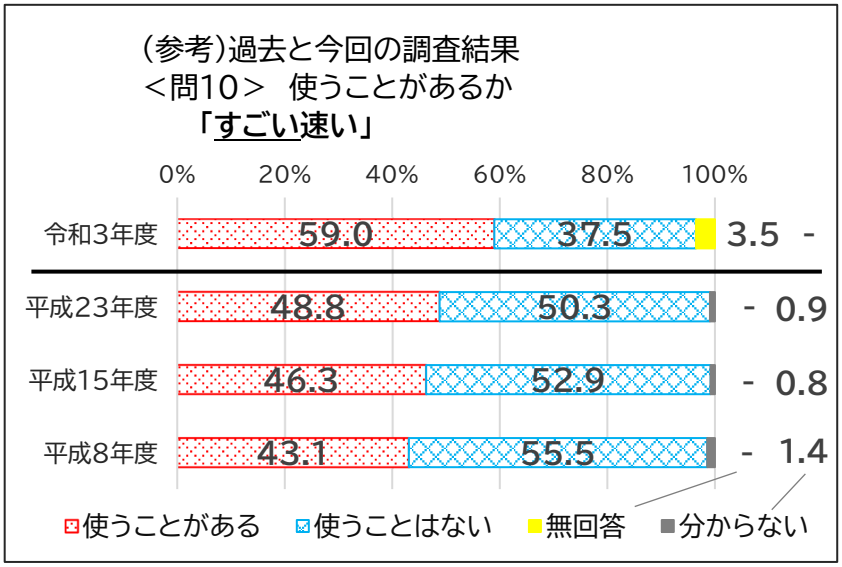
(1)「そうではなくて」ということを、「ちがくて」と言う

平成 12 年度の調査では、「使うことはない」と回答した人の割合が９割代となっていた。



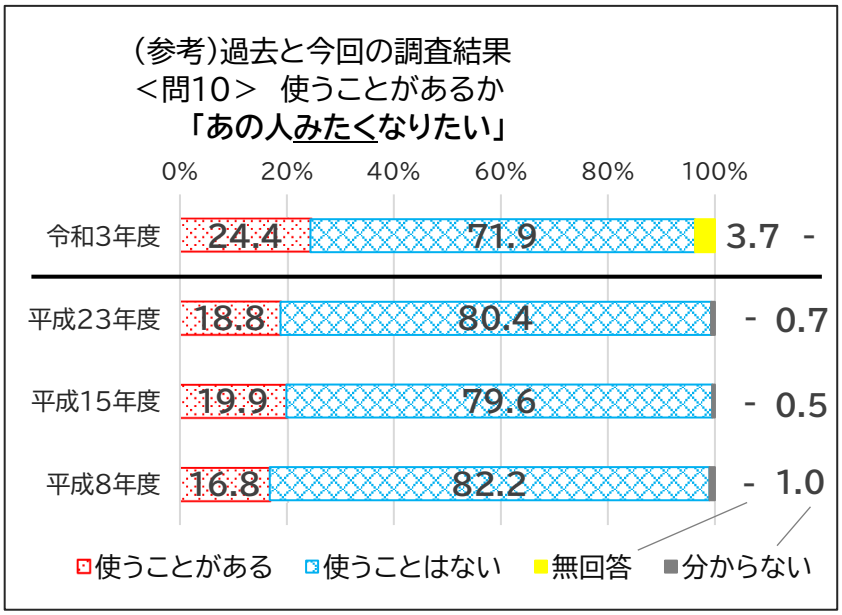
(2)「あの人は走るのがすごく速い」ということを、「あの人は走るのがすごい速い」と言う

これまでの調査では、「使うことがある」と回答した人の割合が増加傾向にあった。



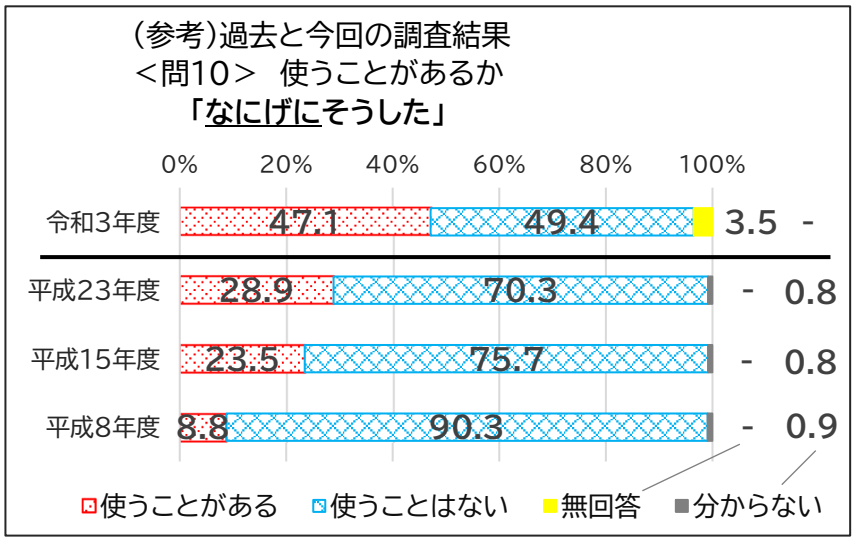
(3)「あの人みたいになりたい」ということを、「あの人みたくなりたい」と言う

これまでの調査では、「使うことはない」と回答した人の割合が、およそ８割程度となっていた。



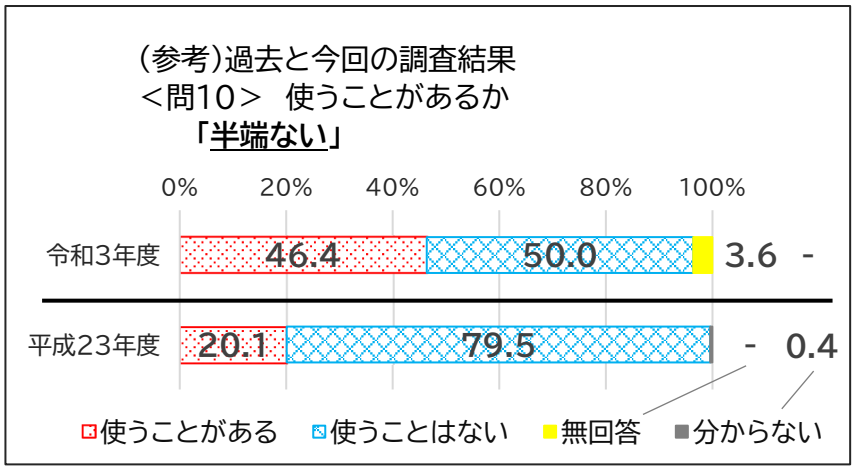
(4)「なにげなくそうした」ということを、「なにげにそうした」と言う

これまでの調査では、「使うことがある」と回答した人の割合が増加傾向にあった。



(5)「中途半端でない」ということを、「半端ない」と言う

平成 23 年度の調査では、「使うことはない」と回答した人の割合は約８割となっていた。



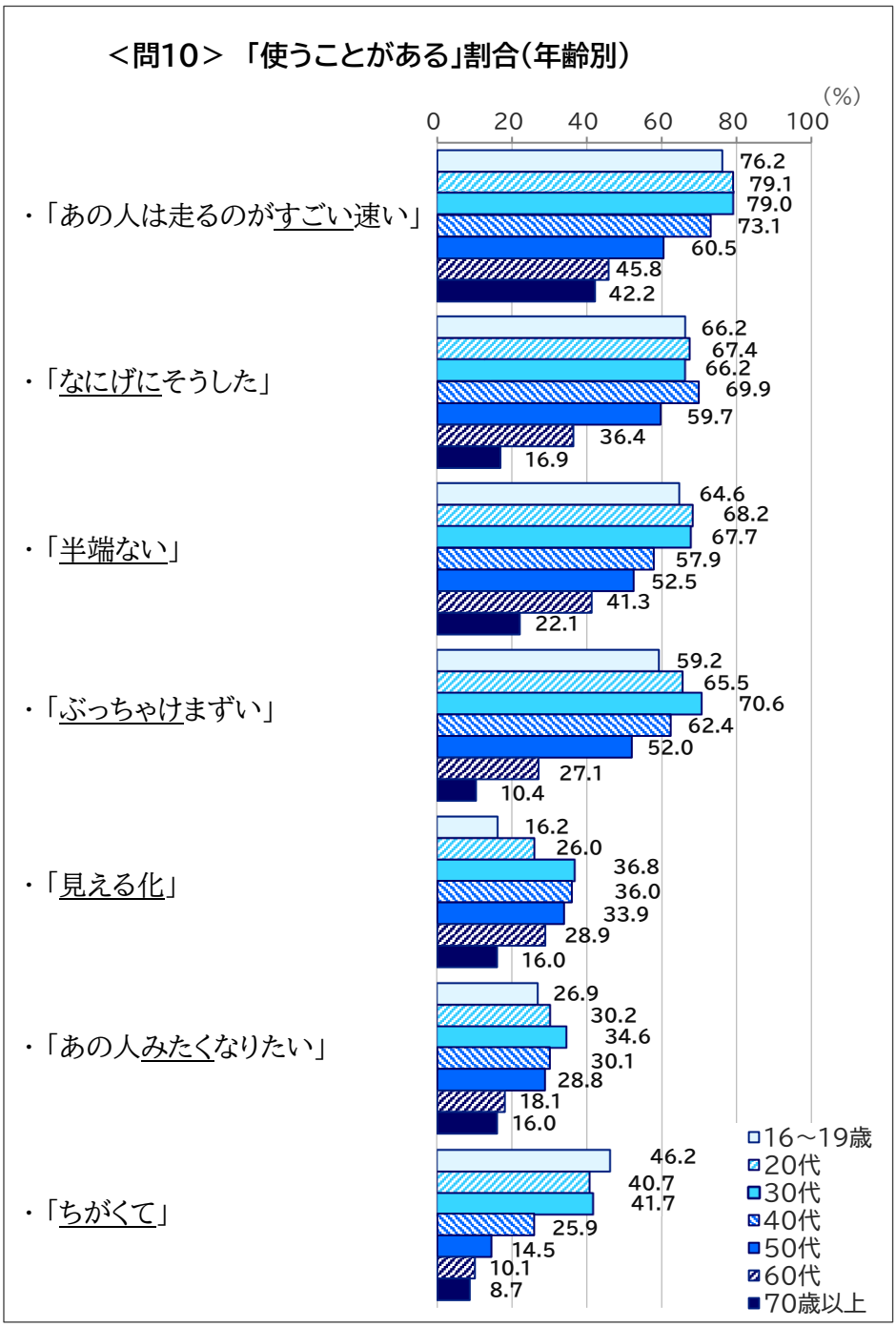
＊ 調査方法の変更のため、令和元年度以前の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。
＊ 過去調査では、質問が「…下線部分の言い方をすることがありますか、それともありませんか。」、回答が「ある」／「ない」／「分からない」となっている。

〔 問 10：年齢別の結果 〕

年齢別に「使うことがある」を選択した人の割合を見ると、次のグラフのとおり。

どの言い方においても、60 代以上では、「使うことがある」を選択した人の割合が、ほかの年代より低い傾向にある。中でも、「なにげにそうした」、「半端ない」、「ぶっちゃけまずい」では、特に 70 歳以上で、ほかの年代より低くなっている。

「見える化」は、60 代以上だけでなく、20 代以下も、ほかの年代より低くなっている。



＜問 11＞気になる言葉（「なにげに」「ぶっちゃけ」等が気になるか）　（＊ p.52）

― 「ちがくて」は「気になる」が約６割 ―

〔 問 11：質問 〕

ここに挙げた（１）～（７）の下線部分の言い方をほかの人が使うのが気になりますか。それとも、気になりませんか。　（一つずつ回答）

（１）「そうではなくて」ということを、「ちがくて」と言う
（２）「あの人は走るのがすごく速い」ということを、「あの人は走るのがすごい速い」と言う
（３）「あの人みたいになりたい」ということを、「あの人みたくなりたい」と言う
（４）「なにげなくそうした」ということを、「なにげにそうした」と言う
（５）「中途半端でない」ということを、「半端ない」と言う
（６）「正直なところまずい」ということを、「ぶっちゃけまずい」と言う
（７）「実態などを分かりやすく示すこと」を、「見える化」と言う

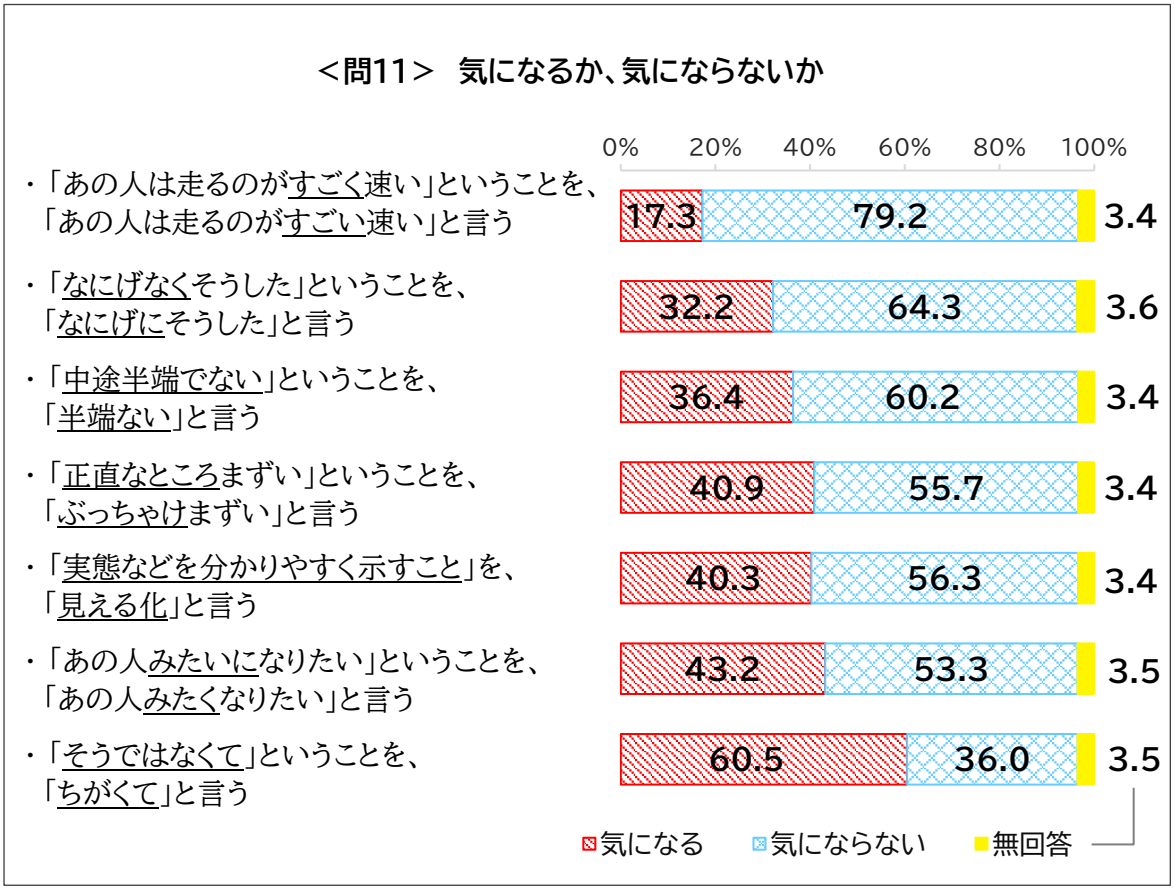
※　調査した七つの言葉は、文法的に破格とされる場合があるもの等の中から、新しい使い方や意味が辞書に記載されてきたものを取り上げた。

〔 問 11：全体の結果 〕

結果は次のグラフのとおり。（並び順は問 10 に合わせている。）

下線部の言い方が「気になる」と回答した人の割合は、「ちがくて」が 60.5%、「あの人みたくなりたい」が 43.2%、「見える化」が 40.3%、「ぶっちゃけまずい」が 40.9%となっている。

一方、「気にならない」と回答した人の割合は「あの人は走るのがすごい速い」が 79.2%、「なにげにそうした」が 64.3%、「半端ない」が 60.2%となっている。

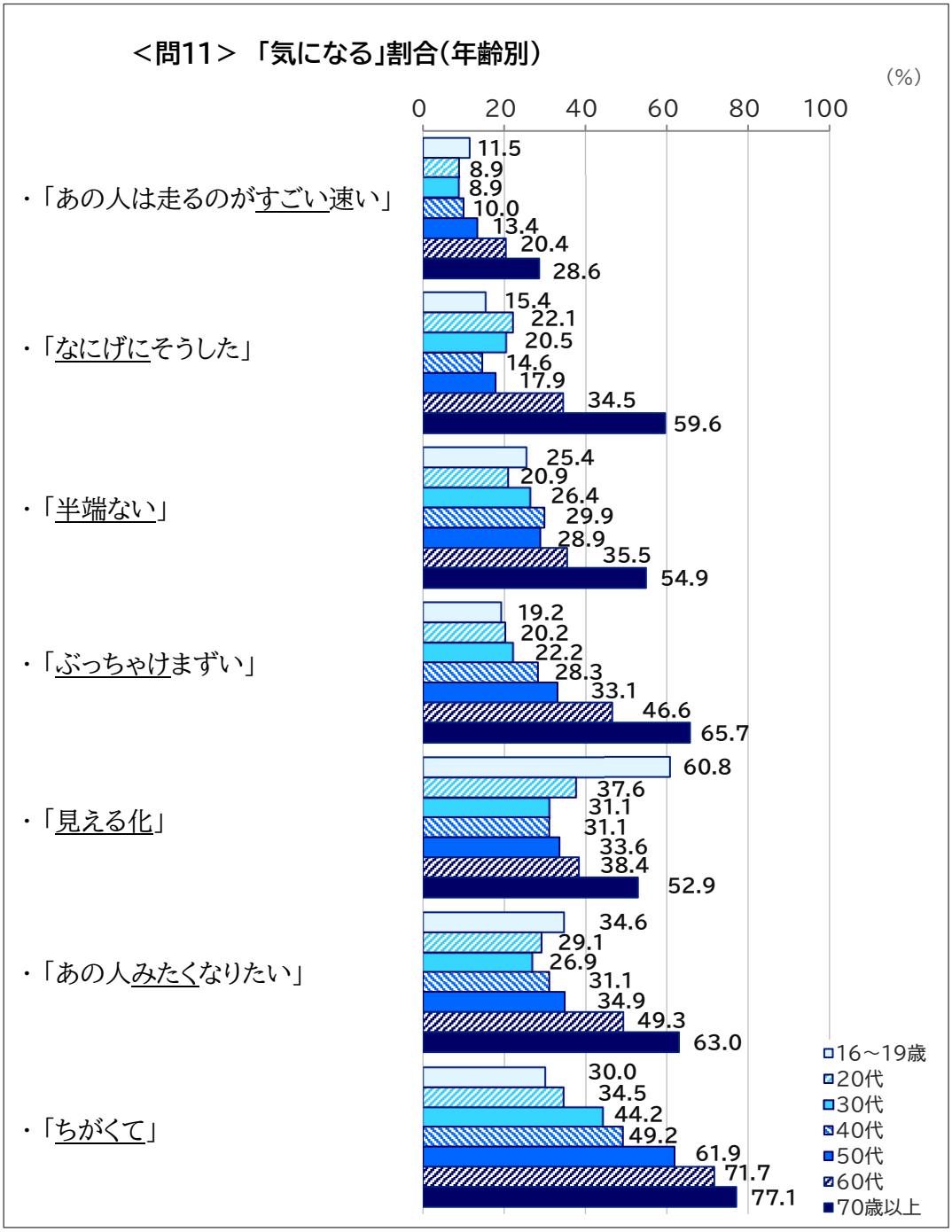


〔 問 11：年齢別の結果 〕

年齢別に「気になる」を選択した人の割合を見ると、次のグラフのとおり。（並び順は問 10 に合わせている。）

どの言い方においても、年代による差が大きく、特に 70 歳以上で、「気になる」を選択した人の割合が、ほかの年代より高い傾向にある。

「見える化」は、70 歳以上だけでなく、16～19 歳も、ほかの年代より高くなっている。



〔 問 11：問 10「使うことがあるか」との比較 〕

全体の結果において、問 10「使うことがあるか」で「使うことがある」の割合が高い言葉ほど、問 11「気になるか」で「気になる」の割合が低くなる傾向が見られる。

年齢別の結果においても、同様に問 10 で「使うことがある」の割合が高い年代ほど、問 11 で「気になる」の割合が低くなる傾向が見られる。

問 10 で「使うことがある」の割合が高い年代がある一方、問 11 で「気になる」の割合が高い年代がある。

＜問 12＞「姑息」「割愛する」等の言葉は、どちらの意味だと思うか　（＊ p.58）

― 「姑息」「割愛する」は、本来の意味とされてきたものとは
異なる方が多く選択されている ―

〔 問 12：質問 〕

ここに挙げた（１）から（３）の言葉は、それぞれ（ア）と（イ）のどちらだと思いますか。　（一つずつ回答）

（１）揚げ足を取る　　（２）姑息（こそく）　　（３）割愛する

〔 問 12：全体・（参考）過去の調査との比較 〕

結果は下の表のとおり。なお、**辞書等で主に本来の意味とされてきたものを太字**で記した。

今回尋ねた三つの語句のうち、「(2)姑息」、「(3)割愛する」は、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる方が多く選択されるという結果となっている。一方、「(1)揚げ足を取る」は、辞書等で本来の意味とされてきたものの方が多く選択されている。

調査方法が変わったため、今回の調査結果との比較には注意が必要だが、過去の調査結果（平成 22、23 年度）も参考値として表に示す。

〈 問 12　どちらの意味だと思うか 〉　　（数字は%）

	揚げ足を取る　例文：人の揚げ足を取る	令和３年度	
(1)	**（ア）言い間違いや言葉じりをとらえて責めたりからかったりする**	**65.9**	
	（イ）失敗ややり損ないを見て責めたりからかったりする	8.8	
	（ア）と（イ）の両方	22.2	
	（ア）、（イ）とは、まったく別の意味	1.6	
	無回答	1.5	
	姑息　例文：姑息な手段	**令和３年度**	**平成 22 年度**
(2)	**（ア）「一時しのぎ」という意味**	**17.4**	**15.0**
	（イ）「ひきょうな」という意味	73.9	70.9
	（ア）と（イ）の両方	5.9	2.9
	（ア）、（イ）とは、まったく別の意味	1.7	2.1
	無回答	1.1	
	分からない		9.2
	割愛する　例文：説明は割愛した	**令和３年度**	**平成 23 年度**
(3)	（ア）不必要なものを切り捨てる	65.3	65.1
	（イ）惜しいと思うものを手放す	**23.7**	**17.6**
	（ア）と（イ）の両方	4.5	1.7
	（ア）、（イ）とは、まったく別の意味	5.0	3.3
	無回答	1.5	
	分からない		12.3

＊　調査方法の変更のため、過去の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

〔 問 12：年齢別の結果 〕

それぞれの慣用句を年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

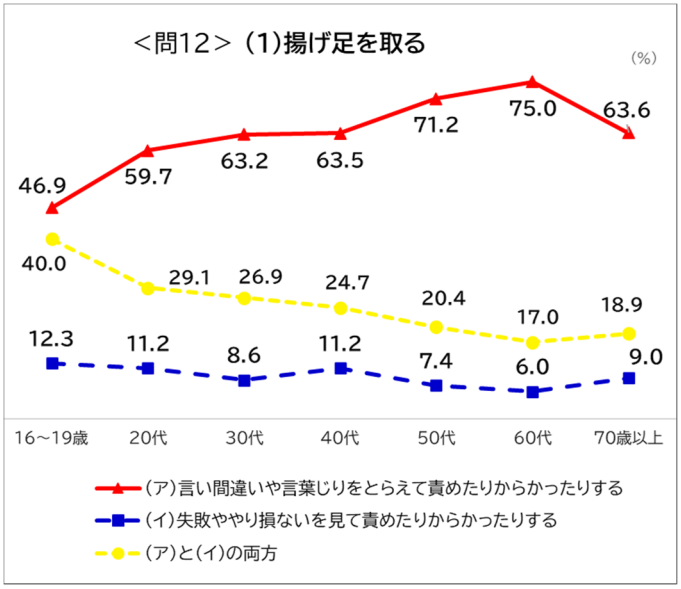
※ 辞書等で主に本来の意味とされてきたものを実線（ ）で表示した。

（１）揚げ足を取る

全ての年代で、辞書等で本来の意味とされてきた（ア）「言い間違いや言葉じりをとらえて責めたりからかったりする」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきたものとは異なる（イ）「失敗ややり損ないを見て責めたりからかったりする」を上回っている。

なお、16～19 歳では（ア）を選択した人の割合と（イ）を選択した人との割合の差が小さくなっている。

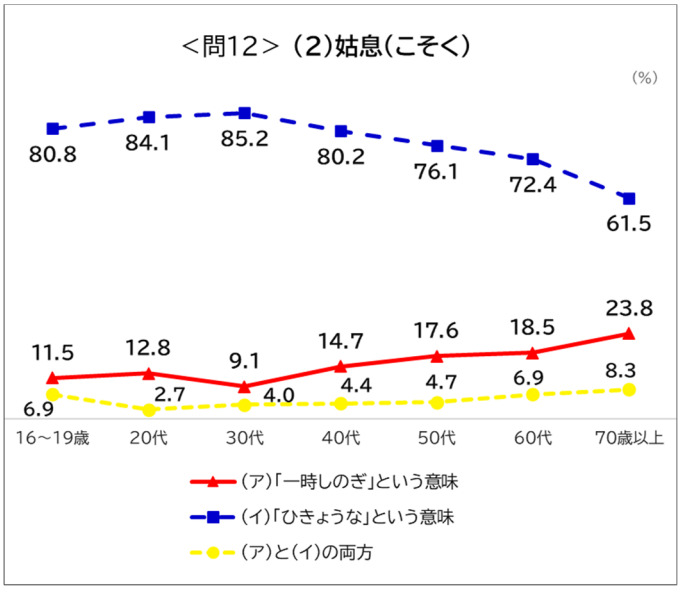
また、年代が下がるに従って「（ア）と（イ）の両方」を選択した人の割合が高くなり、16～19 歳で 40％となっている。



（２）姑息

全ての年代で、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる（イ）「ひきょうな」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた（ア）「一時しのぎ」を上回っている。

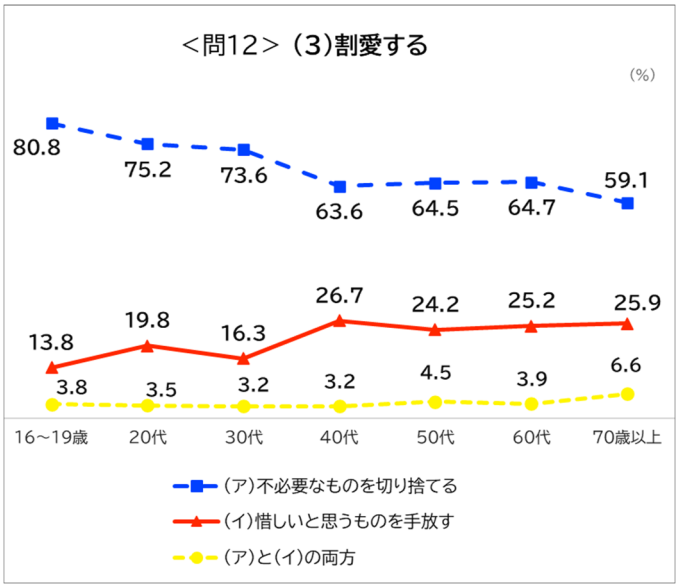
中でも、40 代以下では（ア）を選択した人の割合と（イ）を選択した人との割合に 60 ポイント以上の差がある。



（３）割愛する

全ての年代で、辞書等で本来の意味とされてきたものとは異なる（ア）「不必要なものを切り捨てる」を選択した人の割合が、本来の意味とされてきた（イ）「惜しいと思うものを手放す」を上回っている。

中でも、30 代以下では（ア）を選択した人の割合と（イ）を選択した人との割合に 50 ポイント以上の差がある。



＜問 13＞「声を荒（あ）らげる／声を荒（あら）らげる」等の言い方は、どちらを使うか

（＊ p.63）

― 本来の言い方とされてきたものとは異なる
「声を荒（あ）らげる」が多く選択されている ―

〔 問 13：質問 〕

ここに挙げた（１）から（３）のかぎかっこ内の内容を表現するとき、それぞれ、（ａ）、（ｂ）のどちらの言い方を使いますか。　（一つずつ回答）

（１）脚光を浴びる／脚光を集める　　（２）声を荒（あ）らげる／声を荒（あら）らげる
（３）のべつくまなし／のべつまくなし

〔 問 13：全体・（参考）過去の調査との比較 〕

結果は下の表のとおり。なお、**辞書等で主に本来の言い方とされてきたものを太字**で記した。

（２)は、辞書等で本来の言い方とされてきた「(ｂ）声を荒（あら）らげる」を使う割合が、本来の言い方とされてきたものとは異なる「(a) 声を荒（あ）らげる」を下回っている。一方、（１）（３)は、本来の言い方とされてきた「(ａ)脚光を浴びる」、「(ｂ)のべつまくなし」が、「(ｂ)脚光を集める」、「(ａ)のべつくまなし」を上回っている。

調査方法が変わったため、今回の調査結果との比較には注意が必要だが、過去の調査結果（平成 22、23 年度）も参考値として表に示す。

〈 問 13　どちらを使うか 〉　　（数字は%）

	世間の注目の的となること	令和３年度	
(1)	**（ａ）脚光を浴びる**	**83.4**	
	（ｂ）脚光を集める	7.8	
	（ａ）と（ｂ）の両方とも使う	6.8	
	（ａ）と（ｂ）のどちらも使わない	1.0	
	無回答	1.0	
	大きな声を出すこと	令和３年度	平成 22 年度
(2)	（ａ）声を荒（あ）らげる	79.7	79.9
	（ｂ）声を荒（あら）らげる	**12.2**	**11.4**
	（ａ）と（ｂ）の両方とも使う	3.4	2.7
	（ａ）と（ｂ）のどちらも使わない	4.0	5.1
	無回答	0.8	
	分からない		1.0
	ひっきりなしに続くさま	令和３年度	平成 23 年度
(3)	（ａ）のべつくまなし	27.1	32.1
	（ｂ）のべつまくなし	**41.9**	**42.8**
	（ａ）と（ｂ）の両方とも使う	0.6	1.5
	（ａ）と（ｂ）のどちらも使わない	29.7	18.1
	無回答	0.8	
	分からない		5.5

＊　調査方法の変更のため、過去の調査結果は参考値となり、比較には注意が必要。

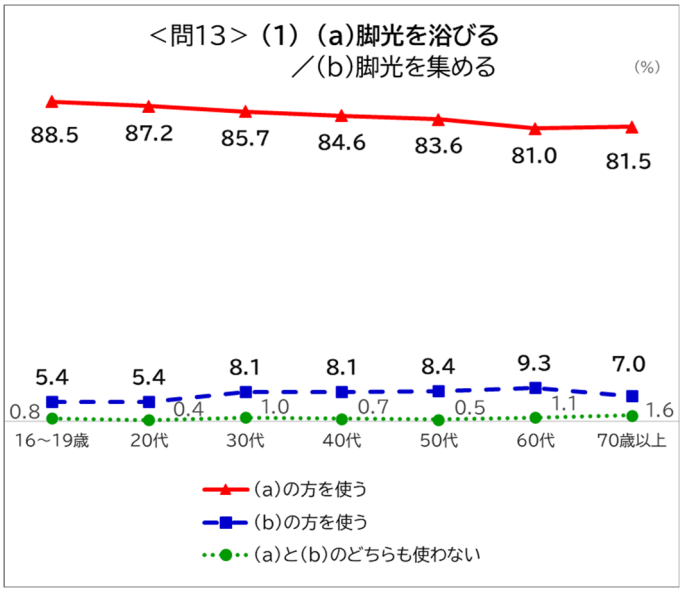
〔 問 13：年齢別の結果 〕

それぞれの慣用句を年齢別に見ると、次のグラフのとおり。

※ 辞書等で主に本来の言い方とされてきたものを実線（ ▲ ）で表示した。

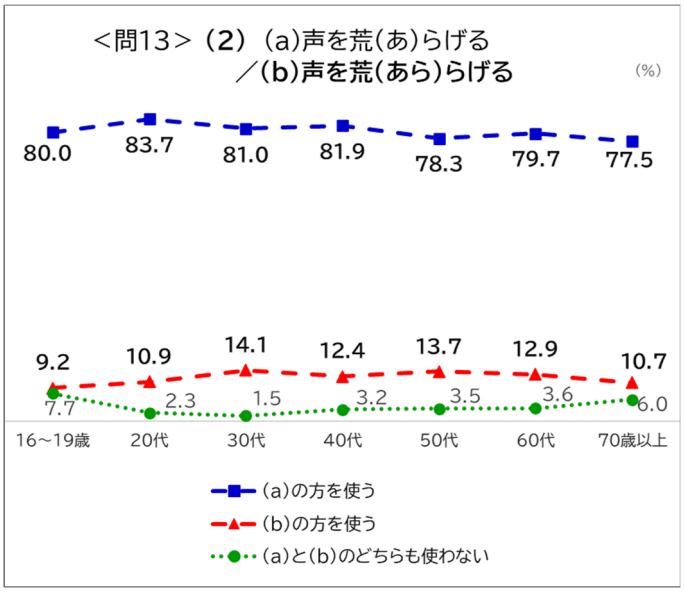
（１）**脚光を浴びる**
　／脚光を集める

全ての年代で、辞書等で本来の言い方とされてきた（ａ）「脚光を浴びる」を選択した人の割合が、本来の言い方とされてきたものとは異なる（ｂ）「脚光を集める」の割合を 70 ポイント以上、上回っている。



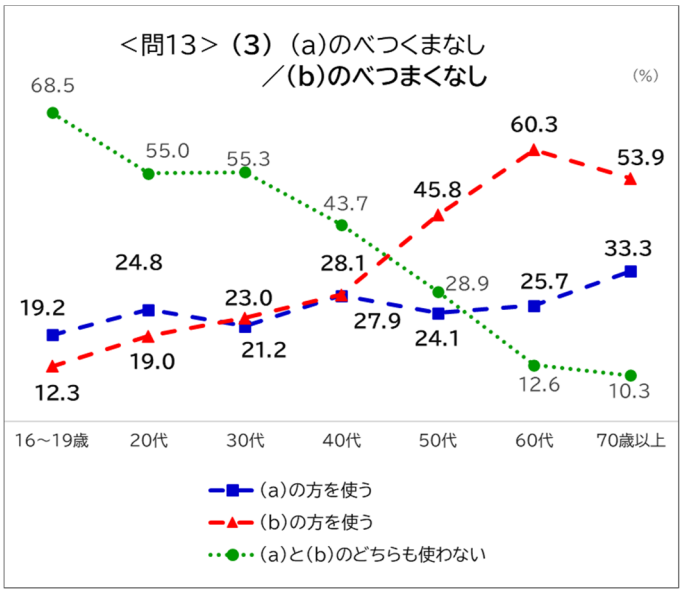
（２）声を荒（あ）らげる
　／声を荒（あら）らげる

全ての年代で、辞書等で本来の言い方とされてきたものとは異なる（ｂ）「声を荒（あ）らげる」を選択した人の割合が、本来の言い方とされてきた（ａ）「声を荒（あら）らげる」の割合を 60 ポイント以上、上回っている。



（３）のべつくまなし
　／のべつまくなし

50 代以上では、辞書等で本来の言い方とされてきた（ｂ）「のべつまくなし」を選択した人の割合が、本来の言い方とされてきたものとは異なる（ａ）「のべつくまなし」を 20 ポイント以上、上回っている。

一方、40 代以下では、（ａ）と（ｂ）の差が小さく、中でも 20 代以下では、辞書等で本来の言い方とされてきたものとは異なる（ａ）が（ｂ）をやや上回っている。

また、「（ａ）と（ｂ）のどちらも使わない」を選択した人の割合が、40 代以下で 40％を超えている。